俳諧名家列傳

寸珍百種
第貳拾三編
能諸士家列傳
籾山釣編
東京博文館藏版

籾山鈞著
俳諧名家列傳
全
東京 博文館藏版

自叙

世に俳諧の集多しといへども皆題に就て句を集めたるものにして句を抄して人に繋けたる者は未之あるを見ずされば夫の七部集を始めとして近人の集に至るまで作例句法を求むる爲めには尤も必要にして缺くべからざるも名家鉅匠の秀吟を一讀の下に瞭然たらしめ其調格を玩味して以て精を啜り華を咀ふの資に供

せんとするには隔靴掻痒の憾みなき能はず是余が叨りに自ら揣らずして此書の撰ある所以なり而して毎人最初に其傳を載する所以のものは蓋し讀者をして所謂古人を尚友せしめんとの旨意に出でたるものにして先づ其傳を閲して以て其言辭性行より一代の事蹟を詳にし然る後に其句に及はゞ吟誦の際己も亦其境界に在りて親しく其謦欬に接するの想ひあるべ

く果して然らんには不知不識の間に其得る所の裨益は決して尠少ならざるべければなり是を序となす

明治二十六年二月上澣

夢幻居士　籾山　鈎撰

例言

一本書ハ芭蕉翁師弟を以て正篇と爲し其他は都てこれを續篇と爲せり

一編次する所の順序ハ唯筆に任せたるものにして時代の前後年歯の少長等を以てせるにハあらず

一俳家中或は傳備はるも句少きものあり或は句多きも傳缺くるものあり是等は姑く割愛して他日の攷索を俟つ

一俳家の書は大抵草体の文字を用ひ且各様の假名文字を交ふるが爲め傳寫の際往々誤謬を致せり故に今これを抄錄するに方り務めて校訂を加へたれども尚は魯魚の訛りな

きを保せず

一人名産地及び生死年月の如きも各書の載する所動もすれば異同なき能はず編者は其最も眞に近しと思惟せるものを取りたれども尙は博雅の是正を望む

一前人の記する所と雖其疑はしき事蹟は省きてこれを載せず蓋し誤りを傳へんことを恐れてなり

編　者　識

俳諧名家列傳附句抄正篇目次

俳諧名家列傳附句抄續篇目次

俳諧名家列傳附句抄續篇目次終

俳諧名家列傳附句抄正篇

有耶無耶樓主人編

芭蕉翁

翁姓は松尾名は宗房通稱は忠右衛門桃青と號す杖錢子、是佛坊ハ其別號なり父ハ儀左衛門といひ母ハ桃地氏なり翁ハ正保元年（甲申）を以て伊賀柘植郷に生る

寛文二年（壬寅）翁年甫めて十九藤堂某（津侯の重臣にて伊賀上野に住す）に仕へて其近侍と爲りしよ六年（丙午）四月某病歿せしかば翁深く哀悼して其遺髮を紀伊高野山の報恩院よ埋瘞せり是より遁世の志止み難くして屢祿を辭すれども許されざりしが故に其年の七月同僚某に一封の書を遺して竊に上野を去り京都よ上りて北村季吟の門に入れり（是より先き已に其主と共に季吟に從學せしことあり）此時翁ハ二十三歳なりき

十二年壬子九月始て江戸に來り延寶二年甲寅に薙髮して風羅坊と稱す時に門人平野杉風翁の爲めに深川六間堀の別莊に草庵を結びて此に居らしむ翁は其庭内に芭蕉を植ゑて之を樂めり是芭蕉庵の名因りて起れる所なり」

翁は學識宏博氣象飄逸にして且禪理に邃し佛頂和尙を師とせり其の俳諧に於ける正風を首唱して竟にこれを大成し斯道に遊ぶものをして從ふ所を知らしむ眞に光前世を蔽ひ澤後昆に垂るゝものといふべし當時及門の弟子二千餘人と稱す嗚呼亦盛ならずや」

翁は又書畫を善くす書は友人北向雲竹に學びて後には自ら一機軸を出し畫は門人森川許六に肄へり

翁は山口素堂、伊藤信德、岡村不卜等と友とし善し時々相會して俳諧に遊べりとぞ

翁は晩年に至りて諸國に行脚すること殆んど虛歲なく專ら雲水の遊びを事とせり左に其梗概を擧げん

貞享元年甲子には伊勢を經て故郷伊賀に赴き芳野に遊び近江、美濃、尾張を回り此年は伊賀の山家に暮れて翌二年乙丑の春は南都に往き京都に上り伏見に至り大津に出で尾張、甲斐を過ぎて深川の草庵に歸住せり

四年丁卯の秋には曾良、宗波の二人を從へて常陸の鹿島に吟行し又其冬には三河、尾張を回り伊賀にて翌五年戊辰の春を迎へ其二月に伊勢の山田に赴き再び伊賀に返りて藤堂某(主の男)に謁し夫より杜國を率ひて芳野の花を賞したる後紀伊の高野に詣で和歌の浦より南都に出で須磨、明石に遊び山城に入り大津を經て岐阜より名古屋に至れり時しも秋將に半ならんとすさらば信濃なる更科田毎の月を觀んとて越人を伴ひ姥捨山に赴き善光寺に詣で、江戸に歸れり

元祿二年己巳の春は曾良と共に日光山に登り夫より奥羽の名所古蹟を跋渉して越後より加賀に入り越前を過ぎて美濃に出で伊勢に至りて大廟の遷宮式を拜し伊賀、大和を經て京都に上り膳所にて翌三年庚午の春を迎へ再

び伊勢、伊賀に至り近江に入り石山なる幻住庵（門人菅沼曲翠の伯父なる人の住捨し庵なりとかや）又は粟津なる無名庵に滯在して此年より翌年に渉り時々琵琶湖畔の勝を探り或時は京都に遊べり斯くて四年（辛未）の冬美濃より尾張を經て三河の鳳來寺に參籠し夫より順路を經て江戸に歸れり此時は桃隣、支考を伴へりとかや七年（甲戌）の夏は尾張、美濃を經て近江と京都に暫く杖を留め秋は伊賀に在りしが浪華よりの招きもあれば南都の重陽を見ながら赴かんとて支考惟然を從へ立出でられしに九月二十九日より痢を病みて療養は怠りなかりしも命數の定まれる所にや藥石効なく十月十二日を以て浪華の客舍（南御堂前花屋仁右衛門の後園）に歿せり享年五十有一

是より先き洛西の去來湖南の正秀を始めとして木節、乙州、丈草、李由の如き近畿諸國の門人輩翁の病に臥すとの報を得るや前後相踵て至るもの十數人適其角も上國に遊びて翁の臨終前一日大坂に着しければ其與に會することを得て去來其他の人々と共に柩を護して粟津の義仲寺に至り

十四日の夜陰よかたの如く葬れり此時京都、大阪、大津、膳所等より來り會せるもの三百有餘人なりしといふ

○

○古池や蛙飛こむ水の音

○物いへれ唇寒し秋の風

菊の香や奈良にれ古き佛達

梯や命をからむ蔦紅葉

○初時雨猿も小簑をほしげ也

衰へや齒よくひあてし海苔の塵

○夏草やつれものどもの夢の跡

○四方より花吹入て鳰の海

○傘に押わけ見たる柳かな

○いさゝられ雪見に轉ふ所まで

市人にいでこれ賣らん雪の笠

○しはらくは花の上ある月夜哉

猿曳は猿の小袖をきぬたかな

落さまに水こぼしけり花椿

夕顔や酔てかほ出す窓の穴

ほろ／＼と山吹散か瀧の音

木の下は汁も鱠も櫻かな

古郷や臍の緒になく年の暮

初雪や水仙の葉のたわむ程

花の雲鐘は上野か淺草か

淸瀧や波にちりこむ青松葉

鎌倉をいきて出けん初鰹

六月や峰に雲おく嵐山

十六夜いわつかに闇の初哉

咲みたす桃の中より初さくら

元日に田毎の日こそ戀しけれ

名月や池をめぐりて夜もすから

一年に一度つまるゝ薺かな

○梅か香にのつと日の出る山路哉

○山路來て何やら床しすみれ草

鶯や柳のうしろ藪のまへ

○蛇喰ふと聞ハ恐ろし雉子の聲

三尺の山もあらしの木の葉哉

十五日たつや睦月の古手買

春なれや名もなき山も朝霞

いなつまに悟らぬ人の尊さよ

降らすとも竹植る日は簑に笠

するか路や花橘も茶の匂ひ

我宿ハ蚊のちいさきを馳走哉

うき我を淋しからせよ閑子鳥

長き日を囀りたらぬ雲雀哉

燕子花似たりやにたり水の影

○雲おり〳〵人を休ます月見哉

○枯枝にからすとまりけり秋の暮

鹽鯛の齒くきも寒し魚のたな

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

いかめしき音やあられの檜笠

○面白し雪にやならん冬の雨

○住つかぬ旅のこゝろや置火燵

○旅に病て夢は枯野をかけ廻る

寳井其角

寳井其角は幼名を源助といふ長して順哲と稱す晩年に及び專ら俳名を以て行はる初め母の姓榎本を冐せしが後に寳井と更む晉子、寳晉齋、狂雷堂善哉庵、六病庵、文合堂等の別號あり父は竹下東順といひて近江堅田の人なり醫を以て膳所侯に仕ふ

其角は頗る多能にして服部寬齋に從ひ儒學を修め草刈三越に就て醫術を

受け詩文及び易占ハ鎌倉圓覺寺の大巓和尙ヌ學び書は佐々木文龍を師として後ヨハ自ら一家を成し書ハ英一蝶に習へり其書名を蓍子といふ人と爲り磊落跌放にして細行を顧みず常ヌ李白の風韻を慕ひ飮を嗜みて一日も醒むることなかりしとぞ

或人嘗て句集の批評を請ひしかば繙き見ていへるやう此集幼稚にして余の附點を煩はすに足らず等儕中の先輩をして評せしむれば可ならん但附點料は披閱の報酬として之を收むべしとて句集のみを返せり又元祿の頃芝の神明前ヌ住せしが或夜その家守と爭論をなし急ヌ退去すべしとて己自ら家具調度を擔ひ高聲に嘲り呼はりつゝ立去りて雪中庵の許に轉居せりとぞ其洒落なること想ふべし

其文房具の中に半面美人の印とて常ヌ珍藏する所のものありしが或時門人某竊に持歸り日を經て其角を招待し獨活の胡麻漬の中ヌ彼の印を匿して出せり其角之れを食ひしに砉然として聲あり異みて撿すれば何ぞ料ら

ん日ごろ愛玩する所の印なり其後其角門人の不在を覗ひ其家に至り酒を僮僕に飲ましめ其酔へるを待て門人が平常尊信する所の日蓮上人自作の佛像を取出し藁繩にて縛り之を厠圊中に吊し置き前日の返報を爲したりとぞ實に一奇談といふべし

十七歳の時芭蕉翁の門に入りしが遂に第一の高弟と仰がる其詠の雄健にして高尚なるには蕉翁も常に嘆服せりとぞ其最終の吟となりたる春暖閑炉に坐するの句は長閑ある春の心に哀れなる秋の氣を籠め自ら其識を爲せるが如し其永眠する前にかき遺せる無限の達摩は深川長慶寺の和尚某之に開眼の筆を加へ其寺中なる蕉翁の塚に隣りて瘞めたりとなん

其角は寛文元年辛丑を以て江戸堀江町に生れ神田於玉ケ池、照降町、芝神明町、萱場町、(一説に坂本町)等に住し寶永四年丁亥二月晦日に歿す享年四十有七芝二本榎上行寺に葬る

其著はす所の書に虚栗、續虚栗、新山家、誰レカ家、句兄弟、盡集、類柑子、花

撰、雜談集、焦尾琴、若葉合、三上吟、枯尾花、裏若葉、五元集、錦繡緞等あり

○

夕涼みよくも男に生れけり
酒を妻妻を妾の花見かな
明月や疊の上に松のかけ
初雪に此小便は何やつそ
我物と思へは輕し傘の雪
末枯や馬も餅くふ宇津の山
菜の花の中に城あり郡山
あれ聞と時雨くる夜の鐘の聲
文月やひとりはほしき娘の子
行水や何にとゝまる海苔の味
鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春
からひたる三井の二王や冬木立
秋の空尾の上の杉にはなれけり

○腰のして念佛申國權かな
烏帽子屋ハ烏帽子きて見よけうの月
○烏帽子きた船頭ハなし都鳥
○川上ハ柳か梅かも丶千鳥
○青海や淺黄になりて秋のくれ
魂まつり門のこじきの親とはん
○夕立や家をめくりて家鴨なく
寐る恩に門の雪はくこじき哉
須磨の浦うしろに何を閑子鳥
○冬來ては案山子にとまる烏かな
○稲妻やきのふハ東けふは西
○雪の日や船頭との丶顔のいろ
いつしかに稲を干瀬や大井川
明星や櫻さだめぬ山かつら
○文ハあとに櫻さし出す袂かな

にくまれてなからふる人冬の蠅
○聲かれて猿の齒しろし峰の月

服部嵐雪

服部嵐雪初め俳名を治助(はるすけ)といふ幼名は久米之助（一説に久馬介）長じて彥兵衞と稱す淡路の人なり其居を號して黃落庵又は寒蓼堂といひしが後よ雪中庵一に又不白軒玄峯堂（雪千山を埋む什麼孤峰不白なるといふ禪語に取れるなり）と改めり

嵐雪江戶に來りて新莊隱岐守及び井上相模守に仕へしが風雅の志止み難くして幾ばくもなく隱遁せり其邸舍を退くの日刀劍衣服其他の調度に至るまで悉く遺し置きて一も攜帶せざりしとぞ

旣にして蕉門に遊び去來と其名を倖ふせり又常に濟雲(さいうんはうちやう)方丈に參禪して頗る道を得たりといふ

其妻の名を烈といへり蓋し嵐雪の切なりと愛よ一奇談あり烈女其飼ふ所

の唐猫を愛すること度に超えたり嵐雪常に誡むれどもかず一日其外出を機として潜に彼の猫を遠隔の地に棄つ晩に及びて歸り來り其所在を問ふ嵐雪知らずと答ふ烈女悲泣して休まず隣家の女竊に告ぐるに其實を以てせり是よりして夫妻の間に數風波を生じければ其時々門人相集りて雙方をなだめ和解を爲さしめたりとかや

晩年に至りて山伏井戸に卜居す烈女已れに先ちて死せしかば遂に出家して一生を送れり

嵐雪は承應三年甲午に生れ寶永四年丁亥十月十三日に歿す享年五十有四駒込竹町常撿寺に葬る

○

元日やはれて雀のもの語り

梅一輪一輪つゝのあたゝかさ

順禮とうちまじり行歸雁かな

ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら

花に風輕くきて吹け酒の泡

○出代やをさな心に物あはれ

石女の雛かしつくそ哀なる

白露や角に日をもつ蝸牛

顔につく飯粒蠅に與へけり

○紫陽花を五器にもられや草枕

○初秋の心動きぬ縄すだれ

○黄菊白菊其外の名はなくも哉

○文もなく口上もなし粽五把

○立出てうしろあゆみや秋の暮

盆まては秋なき門の燈籠哉

相撲とりならふや秋のから錦

○名月や畑はひゆく水の上

○ふとんきて寢たる姿や東山

門の雪臼と盥のすかたかな

菜の花や戶口見つけて廻り行

世話しなき身は瘦にけり作り獨活

めん〱の蜂をはらへや花の春

正月も廿日になりて雜煮かな

若水に智慧の鏡を磨かいや

行燈を月の夜にせんはとゝきす

大勢の中に一本かつはかな

水音も鮎さひけりな山里は

おもしろふ富士に筋かふ花野哉

顏出してはつみを請む玉あられ

猫の來ておもりにかゝる衾かな

向井去來

向井去來名は兼時字は義焉中次郎と稱す後に治郎太夫と改む肥前長崎の人なり其先は河邊左太臣藤原魚名公に出づ累世儒を以て顯はる父立勝に

至り徴されて禁裏の醫官となり兄某其後を襲ふて益壽院と號し法印に叙す

去來兄に從ふて京都に入り飛鳥井家に仕ふ夙に儒學を修め傍ら暦學に長じ又射術に巧みなり平居武を講ずるの暇には詩歌を賦して自ら遣れり元祿の初め蕉門に入りて俳名を去來と號せり既にして社中の徒を壓倒し服部嵐雪と頡頏し殆ど其上に出づるの勢を有す蓋し當時關西の巨擘たり」嘗て洛西嵯峨なる小倉山の麓に一舍を營みて此に住す其舍側に數十株の柿樹あり一夕熟實頻りに墜落し屋上を跳下す因りて其舍に命ずるに落柿を以てせり菊亭內府公落柿舍の三字を書して賜ふ時人之を榮とす去來自ら其舍壁に題して曰く

一　我家の俳諧に遊ぶべし世の理窟をいふべからず

一　雜魚寐には心得あるべし大鼾をかくべからず

一　朝夕堅く精進を思ふべし魚鳥を忌むにはあらず

一　速に灰吹をすつべし烟草を嫌ふにはあらず

一　隣からの居膳を待つべし火の用心にはあらず（一說には火の用心に及ばず）

條々

僧支考の笈日記に曰く去來に烟管を掃除するの癖あり又此をのこに隣の居膳といふことあり是その屋敷守の與平といふ者朝夕の食事を送りける故なりと

晩年洛東聖護院の邊に隱栖して花鳥に戯れ風月を友として風流三昧の外に餘念なかりしぞ

人となり敦厚にして其師に事ふまつること最も恭謹なり一日浪華の急報に接するや直ちに之に赴きて晝夜侍養し義仲寺の送葬には肩衣を着けながら自ら鋤鍬を執れりとぞ以て其性行の一端を知るに足れりされば其讃に曰く

先生爲人　孝弟貞誠　事兄竭力　處事必正

有文有武　風雅華英　存思其人　亡慕其名

去來ハ慶安四年辛卯ニ生れ寶永元年甲申九月十日歿す享年五十有四京都東山神樂岡の北なる鈴聲山眞如堂ニ葬る。

其著はす所に猿簑集、去來抄の二書あり猿簑集は蕉翁の意を承けて編成したるものにして去來抄は翁の死後に其句を抄して以て從學の徒ニ便せるものなり其俳道ニ親切なることも觀るべし

○

元日や家ニゆつりの太刀はかん

瀧壺もひしけと雉のほろゝ哉

五六本よりてしたるゝ柳かな

上り帆の淡路はなれぬ汐干哉

一むしろちるや日裏の赤椿

何事そ花見る人の長かたな

萬歳や左右に開きて松のかけ

一湖の水まさりけり五月雨

卯の花の絶間たゝかん闇の門

有明や片帆にうけて一しくれ

○いそかしや沖の時雨の眞帆片帆

○岩鼻やこゝにも一人月の客

○乗なからまくさはませて月見哉

寐道具のかた〳〵やうき魂まつり

魂棚の奥なつかしや親のかほ

秋風や白木の月よ弦はらん

十六夜や饒まくるゝ空のいろ

○應〳〵といへとたゝくや雪の門

凩の地にも落さぬしくれかな

其古き瓢簞見せよ鉢たゝき

はとゝきす鳴や雲雀の十文字

あら磯や走りなれたる友千鳥

芳野山またちるかたに花回り
動くとも見えで畑うつ男かな
尾頭のこゝろ元なき海鼠かな
鉢叩きこぬ夜となれは朧なり
痩はてゝ香にさく梅の匂ひ哉
山里の蚊は晝中に喰ひけり
松茸や人にとらるゝ鼻の先
有明にふりむきかたき寒かな

僧丈草

丈草は内藤某の男よして幼名を林之助と稱し後に林右衛門と改む常に石川丈山の人と爲りを慕ひ因りて自ら丈草と號す家世尾張犬山成瀨氏の臣なり
資性曠達にして榮辱の何物たるを知らず繼母よ事へて甚だ孝順なり弟某

ハ其產める所なれば之ヌ家を讓りて其心を怡愉せんが爲め嘗て故らに右手の指ヌ傷け刀柄を握り難しと詭りて遂ヌ禪に歸し熊野山先聖寺の玉堂和尙を師とせり（向井去來の作りたる誄中に一日若黨一人を供し竊に君父の家を忍び出道の傍におしきり髮染に引替られける云々とあり）爾時賦したる詩に曰く

多年負屋一蝸牛化做蛞蝓得自由火宅最惶涎沫盡偶尋法雨入林丘

丈草幼より學を好みて博く和漢に涉り又詩文を嗜みて之を善くせり其俳諧に於ける困み學ぶことを好まず感ありて吟じ人ありて語するのみ常には之を忘れたるが如しといへども天稟之に長じて秀吟頗る多く就中「大原や」の句及び「うつくまる」の句の如きは大に蕉翁の感賞を受けたりとかや

蕉翁の歿後は膳所松本の人々相謀り粟津義仲寺の上なる松本山に草庵を結びて佛幻庵と號けしかば丈草ハ此に住みて復び山を下らず常に柴關を閉ぢて日夕法華經を誦し以て亡師の冥福を修せりとぞ

丈草ハ寛文三年癸卯ニ生れ寶永元年甲申二月二十四日に寂す享年四十有二近江粟津龍ヶ岡東林の中に葬る

○

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月

啄木鳥の枯木探すや花の中

取つかぬ力てうかむ蛙かな

鶯や次第上りの茶の木原

我事と鰌のにける根芹哉

眞先に見し枝ならん散櫻

引よせてはなし棄たる柳哉

夕棄やしけりにもるゝ川の音

ぬけ売と並んで死ぬる秋の蟬

辻堂に梟たてこむ月夜かな

舟引の道かたよせて月見哉

北嵯峨や町うちこして鹿の聲

時鳥なくや湖水のさゝ濁

○居風呂の下や案山子の身の終り

ゝ精靈も出て假の世の旅寐かな

屋根ふきの海へねちむく時雨哉

黑みけり沖の時雨の行處

鷹の目の枯野にすわる嵐哉

水底の岩に落付く木葉哉

うつくまる藥鑵の下の寒さ哉

着て立て夜の衾もなかり鳧

有明にふりむきかたき寒さ哉

歸空なくてや夜半のやもめ雁

松風を中よ青田のそよき哉

雨乞の雨氣こはかる借着哉

歸來る魚のすみかやくれ簗

谷越に鳴子の綱や窓のうち

青空や手出しもならす秋の水
野も山も雪にとられて何もなし
ㄖさみしさの底ぬけて降る霙哉

森川許六

森川許六名は百仲字ハ羽官通稱ハ五助其居を五老井と名づく自ら稱して菊阿佛といへり家世彥根侯ヱ仕ふ
許六人と爲り聰敏にして文藝に達し又書ヱ巧みなり故に俳諧ハ蕉翁の弟子たれども書ハ却て蕉翁に師たり
許六時としては傳燈直指の俳諧は我にありなど已の才を自讃して他人を芻狗視するのみならず動もすれば其師を輕侮するが如き放言を爲すによりて世には自負家と見做せる人多しといへども是即ち俳諧者たる所以にして能く戯謔せるものといふべし其交る所ヱ信あつくして先師ヱ禮ありしことハ次に示せる文書にてもこれを知らるゝなり

らせ候兼て大なる像刻み度望御坐候へども病氣にて叶ひがたく候猶又得御意申候不備

霜の後像に添へき菊もなし

十月三日　　　許六

智月尼様

五老井に四絶勝あり草宇藤、揚揮豆、雲花園、紫芝岡、是なり常に此に逍遙して風雅の媒となせしとぞ

許六晩年惡疾に罹りて人に面することを肯せず偶客の來訪することあるも屏風を隔てゝ應答するのみ然るに其莫逆の友たりし金澤の生駒萬子一日來りて面晤せんことを求めしかば爭でか屏風を隔つるを要せんとて直ちにこれを病床に迎へて盃酒を侑めいと懇に語り合ひ獻酬數刻に及びた

りとかや常に妻子にだも相見ることを厭ひしに其舊友に對して斯の如くなるは風雅の交りは自ら別なるものと知らるゝなり

許六は明暦二年丙申に生れ正德五年乙未八月二十六日に歿す享年六十終焉の偈及び辭世の狂歌あり

一時打破屎糞蠹　芬々臭氣供梵天

下手ばかり死ぬるものぞとおもひしに上手も死ねばくそ上手なり

其著はす所の書に和訓三体詩、俗文選、匀塞其他に俳書數編あり

○

青海苔も和光の塵の一つかな

春慶の膳すゑわたす花見かな

出代や給仕しまふて暇こひ

陽炎や壁のぬれたる夜の雨

清水の上から出たり春の月

田樂や仰むく口へ舞ひいり

春なれや田の青のりに鳴く蛙

四五月の卯波さなみや郭公

卯の花に蘆毛の駒の夜明哉

産月の腹をかゝへて田植かな

一番よかゝしをこかす野分哉

世にすめはたゝかれくらす西瓜哉

明月や一こゑくもる天津雁

十團子も小粒になりぬ秋の風

闌干よのはるや菊の影法師

唇や蓼くひし跡よ秋のかせ

芋を煑る鍋の中まで月夜哉

血の附し鼻紙寒き枯野かな

嫁入の門も過けり鉢たゝき

臘八や腹を探れば納豆汁

春たつや歯朶にとゝまる神矢の根

苗代やうれし顔にもなく蛙

灸の點干ぬ間もさむし春の風
木佛れ殊勝過たり涅槃像
人さきよ醫師の袷や更ころも
一竿は死裝束や土用ほし
○看經の間を朝顔の盛り哉
裸身よ麻の匂ひや相撲取
○はつ雪やまつ厩から消そむる
新藁の屋根の雫や初時雨

支考

支考は其氏名を詳よせず美濃の人なり東に遊びては東華坊と稱し西よ遊びてハ西華坊と稱せり又出てゝ野に在るときは盤子といひ入りて家に在るときは獅子老人といへりとぞ其他見龍、萬寸、鍛丁、靈乙子、是佛坊、華表人、梅花佛、桃花仙等の別號あり

弱冠の頃禪に入りて鎭藏主と稱せしが才氣の勝れし爲め儕侶の忌む所となりて禪機を挫き寺を出てゝ伊勢山田に住せり涼菟其才を惜み勸めて燕翁の門に入り俳諧を學ばしむ其伎倆たる許六と伯仲の間に在り
支考寺を去るの後といへども久しく僧形を變せず且能く僧律を持せしが一旦緇衣を脱するの心起るや復顧慮する所なかりしとぞ以て其人と爲りの放縱なるを觀るに足れり
或年尾張の巴靜と共に伊勢に赴かんとて熱田より桑名に航するとき頃しも中春のことゝて遠き山々は猶殘雪を戴き白玲瓏たるに郊野は已に草花爛發して氈を敷くかと疑はれ海上亦波靜にして一碧瑠璃の如く實に繪にだも寫し能はぬ景色なりしかば巴靜は支考の脊を拊て一句なかるべからずと促したるに支考は古人も美景に逢ては啞するといへり斯る景色に對しては名句を發し得るものにあらず故に今夜旅宿に投じて火爐を擁したるときに詠すべしと答へたりとなむ實に卓見家の言なりといふべし

寶永七年庚寅春三月京都東山の雙林寺に亡師の碑を建て海内の門葉を會して三日夜の法樂を爲せり其卷頭には遊行上人の句を請ひ其卷軸よは嵐雪の吟を載せ其序文は山口素堂の作る所あり又支考が自ら撰したる碑の銘辞は左の如し

あづさゆみ　むしさの國の　名にしあふ　世を墨染の
さきよたつ　人にあらずに　ありし世の　とのはいみな
聲ありて　その玉川の　みなかみの　水のこゝろゝぞ
汲てしれ　六すじ五もじ　たてよこに　流れてすへに
ふか川や　此世を露の　おきて寐て　その陰たのむ
そのはだに　いつ秋風の　やぶりけん　其名許りよ
とゞしおきぬ　春のかたみの　人も見ぬ　身をなにはづの
はなとさく　花のかたみの　夢ぞさめぬる

支考が一生の事業は著述よして其後世に益する所少小ならず晩年故國に歸隱して俳諧を其徒に授け遂よ美濃の一派を起すに至れり

支考は寛文五年乙巳に生れ享保十六年辛亥二月七日に歿す享年六十有七其著はす所の書に本朝文鑑、和漢文操、俳諧古今抄、俳諧十論、十論爲辨抄、續五論、葛松原、東西夜話、笈日記、新撰大和詞、和漢百花譜、徒然草讃等あり

○

馬の耳すはめて寒し梨の花

餅くれぬ旅人はあし桃の花

鳥の音も絶えす家陰の椿哉

片枝に脉や通ひてうめの花

水すみて籾の芽青し苗代田

梅か香の筋に立よる初日哉

月花の目を休めはや春の雨

我笠や田植の笠ゝましり行

竹の子や何所てかぬけて繩はかゝり

送別　全

出女の口紅おしむ西瓜かな

○物思ひ〳〵なく鶉かな

かなしかる秋をめてたふ菊の花

白川てひかせ給ふな秋の風

○雁の聲おほろ〳〵と何百里

早稲の香や蟹ふみわける磯の道

何なりとからめかし行秋の風

○腸に秋のしみたる熟柿かな

○叱られて次の間よたつ寒さ哉

野は枯てのはすものなし鶴の首

歌書よりも軍書に悲しよしの山

葉も刺も心には似ぬわさみかな

蝨の目の何かさとりて早合點

○花のさく木はいそかしき二月哉

灌佛や目出度事に寺まゐり

ほとゝきす鴉の月夜や待もうけ
の待霄はまたいそかしき月見哉
菊の外更に花なし後の月
霜月の霜のひかりや月と花
あの聲の鉦木は細し寒念佛
の牛吼る聲に鴫たつゆふへかな

鯉屋杉風

杉風名は一元平野氏通稱は藤左衛門又五兵衛と稱す江戸小田原町の魚商にして鯉屋は即ち其屋號なり別號を鶴歩、簑翌又は採茶庵といふ杉風夙に風雅に耽り兄仙風と倶に蕉翁の門に遊べり既にして仙風世を去りしかば其産業を襲ぎて家道頗る裕なりしも聾を以て一生を終はれり延寶二年甲寅蕉翁將に江戸を發して他に赴かんとするや杉風切に之をとゞめ深川六間堀なる巳の別莊中に草庵を結びて此に居らしむ芭蕉庵即ち是

なり

或書に蕉翁の歿後支考と絶交せるよしを記すれども其説の妄誕なることハ次の文書を見て之を知らるしゝなり

愚事も早世上にやかましく口よいづるも我と吟じて我を慰むばかりに候諸事御免可レ給一候兩年の中にハ追善の句を請申にて有べく候以の外病苦おもり候

蚊のすねも遠者に見ゆる夏の中

右ハ杉風より支考に寄せたる者にして牧童が巣刈笛集に載する所なり」

杉風は正保四年丁亥よ生れ享保十七年壬子六月十三日よ歿す亨年八十又六築地浮勝寺よ葬る

○

冴初る鐘や十夜の場の月

咲はてゝ霜よ恥すや女郎花

巻付し其草ともに枯かつら
冬籠夜晝竹のあらしかな
○館船上野の櫻ちりにけり
提灯の空に詮なし時鳥
○晝寝して手の動きやむ團扇哉
一橘や定家机のありところ
紅梅は娘すまする妻戸哉
かつくりとぬけそめる齒や秋の風
一川添の畠をありく月見哉
丶名月やこゝは朝日もよい處
一遅うくるゝ日もけふきりの名殘哉
○春雨や鶯はいる石燈籠
むつくりと岨の枯木も霞けり
○子や待ん餘り雲雀の高上り
風なくて靜過たり藤の花

若菜野や鶴つけそめし足の跡
飛胡蝶まきれてうせぬ白牡丹
笹竹の雀秋しるうこきかな
陽炎や柳のたれにのほりつゝ
○手をかけて折らて過行木槿哉
このくれも又くりかへし同し事
大方の木の葉よあるや蟲の穴
十六夜や我身にしれと月の缺
見るうちよ畔道ふさくかりは哉
花に氣のとろけて戻る夕かな
○朝顔や其日〳〵の花の形
雪の松折口見れは猶寒し
△つめたさの身にさし通す冬の月

立花北枝

立花北枝通稱は三郎左衛門別號を翠臺また趙子といふ加賀小松の產なり金澤に住して研刀を業とし前田家に仕ふ

翁

北枝初めハ西山宗因の風雅を慕ひしが後には芭蕉翁の門に入れり或年蕉翁に吾子を試むるのみ北國に吾子あり斯道興隆すべしとて大に嘆賞し爾來北枝を北國の逸士と稱されしとぞ

あか〱と日ハつれなくも秋のかせ

との一句を得られしが故らに秋の風を秋の山とおして北枝に示せるに北枝は山を改めて風となすの愈れるに如かずといひしかば翁は驚きて余特に

其友如柳は隣家に住みて酒を販げり北枝生來飲を嗜むが故に日夕其家に至りて醉を盡しゝかば後にハ如柳も稍之を厭へるが爲め暫く往て飲むに由なかりしが一日訪來りて其下婢に向ひ糠味噌ありやと尋ねけるに下婢ハ其暗に酒を促すものなることを覺りてこれなしと答へり北枝ハ更にい

ふやうこれなくんば一杯飲むべしと如柳聞きて捧腹絶倒し終に醉を盡くさしめたりとぞ又或夜のことなりしが北枝の家に友人相集りて俳諧を催せしに夜半の比偷兒侵入せりこれを知る者ありて竊に斯くと告ぐれば北枝は笑ひて何れ煤掃には出づべしといひて其坐をも起たゞざりしとぞ又元祿年間金澤に池魚の災ありて市街大半は烏有に歸し北枝の屋舍も亦燒失せしかば訪ひ來れる友人に向ひ「やけにけり」の句を示して自若たること平常の如くありしと其のち再び火災に逢へる時門人從吾他人に先ち馳せ來りてむかしの氣力やあるか如何にといひつゝ

もろともに硯も筆もすみとある烟の中に一句そもさん

とありしかば北枝は取敢ず之に答へて

もろともに硯も筆もすみとなり其言の葉をかく物ぞなき

其滑稽洒落なることと概ね此類なり眞に雅人とこそいふべけれ此時數多の俳友訪ひ來りて作りたる句をば集めて燒見舞と名づくる一冊を編めりと

いふ
從吾は日に夜に変はりたる中なりとて其病に臥すや絶えず尋ね往きて湯藥のことまでも注意しけるに其羸憊を極めて起つ能はずと聞き更に往かず既にして其命終れりと聞き周章して走り往き其棺に對して從吾よ汝吾を舍てゝ逝けりとばかりにて聲を放ち大に慟哭しけりとなん蓋し其訪ふことの一時絶えたるは死別の情に堪ふることの能はざるよりして然りしものなりとて初め譏りたる輩も大に感心しけりとかや。
北枝は享保三年戊戌五月病歿す享年詳ならず金澤卯辰山心蓮舍に葬る

○

元日や疊の上に米俵
夕風に何ふきあけて朧月
山川て心はやるな花の雲
送別
一田を買ていとゝ寐られぬ蛙哉
鶯や傳ふておりる梅の花

詣翁塚

山吹やこぼれし泥に上かはき
蝙蝠よ手もともくらし油賣
大空も見えす若葉の奥深し
破かねの響もあつし夏の月
帆柱のならふや霧のむかひ島
來る秋は風はかりてもなかり鳧
竈馬や顔へとひつく袋棚
初霜や麥まく土のうら表
池の星またはら〳〵と時雨哉
笠提て塚をめぐるや夕しくれ
時雨ねはまた松風のたゝおかす
傘のいくつ過行雪のくれ
竹賣て酒よ替ばや露しくれ
夏酒や我とのりこむ火の車
うぐひすも笠着てのぼれ小屋の屋根

さい桃の祝儀はならす水鶏かな
鶯ははくりど笹の氷かな
焼にけりされども花は散すまし
虫はしや幕をふるへは櫻花
夜やそれ人間のあそふ時
有明やひかりおさまる桃の花
魂まつり甥かゐたらハ茶の通ひ
追上て尾上に聞かん鹿の聲
田の水を見せて螢のさかり哉
うち入て先あそふなり池の鴨

志太野坡

志太野坡ハ越前福井の商にして通稱ハ彌助樗木社と號す蕉翁に從て炭俵の撰號を得たり

初め江戸に來りて兩替町に僑居し既にして去りて大坂に赴き晩年蕉翁の

無名庵を高津に移してこれに住し自ら高津翁と稱せり
蕉門中俳諧附合を善くするものハ野坡、越人の二人を推す野坡又發句に巧みなり
一夕偸兒其家に入りしかば野坡之に謂て曰く我に一物の貯へあるなし唯晝間茶を購ひ置けり今夕殊に寒し來りて暖を取り談話すべしとて爐に薪を添へしかば偸兒は頷きながら左右を注視して机上の詠集に草庵の急火を遁れ出てと前書して「我庵の」の句ありしを見出し何時のことなりしやと問ふ野坡しか〳〵なりと其由を答へけるに眼前の事も亦詠じ得べきやといへるに由り直ちに「垣潜る」の句を吟じて示しければ大に感心して俳諧師は大器なるものかなといひながら其携へ來れる品物を悉皆遺し置きて立去りたりとぞ野坡の如きハ眞に脱俗せる人物といふべし
野坡ハ寛文三年癸卯に生れ元文五年庚申に歿す享年七十有八

○

我庵の櫻もわひし畑り先
垣くゝる雀ならあく雪の跡
散椿あまりもろさよ積てみる
苗代や二王のやうな足の跡
押て見る山の乾きや蕗の薹
五人扶持取てしたるゝ柳哉
はのくと烏黑むや窓の春
思ひたつよしのゝ人も花見哉
子規顏の出されぬ格子かな
夕涼あふない石へ上りけり
つゝまれて水ものひたる蓮哉
靜にはなかれぬ雛の調子かな
葉かくれて見ても朝貌の浮世哉
我人と爭ひなくて月見かな
母の目のわかぬ程うつ砧かな

悼菊

とひかへる竹の霰や窓の内
力なや膝をかゝへて冬籠
ともし火も動かて丸し冬籠
一村は皺にこつむや冬かまへ
百筋も春の色ありいとさくら
春たつや捨しはすてし世に出たり
ほんのりと日のあたりたる柳哉
みな〳〵に咲揃はねと梅の花
待霄にひとつ徳あり宵月夜
魂まつり皆若い衆よつかはるゝ
盆の月寐たかと門を叩きけり
秋もやゝ雁下りそろふ寒かな
初雪や塀直さむといひくらし
此頃の垣の結目や初しくれ
猫の戀初手から啼て哀なり

越智越人

越智越人は佐分利平次郎と稱して肥後熊本藩の士なりしが故ありて致仕し尾張名古屋に來り住せり

夙に俳諧を嗜みて蕉門の老手なり其即吟に長せることは蕉翁も之が右に出づる者なしとて常に感賞されしとぞ

嘗て蕉翁の行脚に隨伴せんことを約せしに何時か其發心の弛みたりけん時々艾(かはよ)き少婦なんどの其家に出入せしこともありしかば翁は其志の堅からざるを歎き次回の行脚の時には訪問をもなさずして自然と疎まれしを越人は痛く悔ひ「うらやまし」の句を詠じて翁に寄せしかば翁は其慚愧せるを憐嘉みみして之を去來の許におくり猿簑集中に載せしめたりといふ

蕉翁歿して後支考先師の夢想の傳などゝて妄言杜撰(ばうげんづざん)の事を記して世人を

誑かしければ越人ハ大に其無狀を怒りて不猫蚊と題する書を著はし其非を辨駁(べんばく)し其罪を責讓(せきじやう)せり實に俳道に親切なる人といふべし
越人老後其鄕里に歸り元祿十五年壬午三月十四日病て其家に歿す熊本流長寺に葬る。

○

山吹にあふなき岨のくつれ哉
奈良漬に親よふ浦の汐干かな
面白や理くつハなしに花の雲
梅の花もの氣に入らぬけしき哉
藤の花たゝうつふいてわかれ哉
君か代やつゝく祭も鍋ひとつ
かつて鳥板屋の背戸の一里塚
栃の木の至り過たる若葉かな
撫し子や蒔繪書手をうらむらん

○ちるときの心安さよけしの花
山寺よ米つくほどの月夜かな
○雨の月どこともなしに薄明り
明月ハ夜明るきはもなかりけり
秋の暮灯やともさんと問に來る
力なや鹿かるあとの秋のかせ
○夕顔に雑炊黒きわら屋かな
○行年や親に白髪をかくしけり
ほろ〳〵と落る涙や蛇の玉
○花なから植替らるゝ牡丹かな
○見返れは白かへいやし夕かすみ
・稗の穂の馬逃したる氣色かな
うらやまし思ひきるとき猫の戀
、聲あらハ鮎も鳴らん鵜かひ船
山路の菊野きくとも又ちかひけり

り
餘の木よも紛れぬ冬の柳かな

の
春風よ帯ゆるみたる寐かほ哉

僧浪化

僧浪化ハ東門跡一如大僧正の連枝にして應眞院と號す越中井波瑞泉寺の住職なり

或年京都よ上り向井去來が落柹舍に於て始めて蕉翁に見えて師弟の契りを結び互に酒杯を酌みかはせりされば砥波山集よも御こゝろざしの目出度おぼへぬれば予も一かたよおもひはべる由を實晉子も記せり其一生の句を集めたるものを白扇集と名づく

浪化夙よ文に名あり嘗て戯に滿足と稱する徒弟の說を書せり其文よ曰く

汝は滿足か汝が性のにぶきこと餡を研て小刀よし瓜の皮をむくが如しされば甘きものをもてむかば自然にむける道理もあらん此ゆへよ

汝を遣ふことハ狙公が猿を養ふにことならず茶を汲すれば冬の夜た汲わかし箒をとれば春の日を掃くらすハ竹田が人形ならんにも土計の限りはあるにこそさるや汝が顔の漫々として湯とも粥ともわかれざれば其にぶきを體となし其靜なるを用とせる爰に於て生を養ふといふべしことしは東華坊に談せられて自慢の慢の鼻や高き饅頭のまんの光りやはなてる但し滿足の二字をもて汝が顔の萬福を稱せば汝が心ハこれ滿足なるべし

浪化は寛文十二年壬子に生れ元祿十六年癸未十月九日寂す時に年三十又二其著はす所の書に浪花秘文抄、有磯海、砥波山集等あり

○

人こみの中へしたる丶柳かな

鶯も畑て出あふわか菜かな

鹿からを踏折る背戸の月見哉

生れ子は佛も赤きつゝし哉
時鳥雨のかしらを鳴て來る
つりそめてかやの匂ひや二三日
白鷺の葉すりに動く早苗哉
首立て鵜のむれ上る早瀬哉
極樂ハいつも月夜よ十夜哉
春待や机にそろふ書の小口
ふんはつて峠をこゆる野分哉
魂まつり殊に女のいとことし
疱瘡する兒も見てけり麥の秋
大雪やとなりのおきな聞合せ
牛馬のくさみもなくて時雨哉
わけ入ハ巣鷹の聲やをのへ川
一本をくるり〳〵と花見かな
鶯や谷の心て籠のあひ

○夜通しに何を歸雁のいそき哉
日和よくなるとて夜の野分哉
のら猫の聲もつれなや寨のうち
せきそろや夕日につゝく袋持

園女

園女は晩年に及びて知鏡と稱す度會(わたらひ)氏の女にして伊勢松坂の人なり既に長じて岡西惟中に嫁し浪華に住せり性風流を好み和歌を善くし又俳諧に巧みなり初め美津女(伊勢山田の産にして杉本光貞の妻なり)に學びしが後には蕉翁を師とし翁歿して後は更に晉子に從へり善く貞操を守り集會の席といへども嘗て男子と並び坐せることなく夫死して後は江戸に來り尋で京師に遊び既にして復江戸に歸住(或書に眼科を常の產業とすとあり)せり

生玉琴風園女の人と爲りを記して曰く此女むかしより世事に疎く袖下の

紅絹を切て下駄の鼻緒を調へ張文庫の蓋を取りて水あがしに用るなんどその跡かたもなき事も風雅のうへの興なりけらし近き頃佛道ょ入て天窓丸めたれど眞中を十筋ばかり殘せるも可笑し是は唯一のむかしを恐る成べし斯の如き者ゆへ禪理も悟道せしにや自ら雲虎和尚に答る書ょも

來書の趣拜見申候不求眞不求妄は大道の根源誰も存ずる所憚ながら珍からず候一心源頭に上ての所作柳は綠り花は紅ゐその儘ょして常ょ句をいひ歌を綴て遊申候事ょ候無益の口業ならば一切經も無益の口業にて候法臭き事は嫌ょて我平日の行は念佛と句と歌となり極樂へ行はよし地獄へ落るは目出度し

和玉韻

自已念其不覓心清澄已耀一燈心市中點々有明鏡全識人間清淨心

誰か見ん誰か知へき有ょあらす無にもあらぬ法のともし火

其才氣すべて此の如しとあり又其辭世に曰く

秋の月春の曙見し空は夢か現か南無阿彌陀佛

園女は承應二年癸巳に生れ享保十一年丙午四月二十日に歿す享年七十有四或書には六十三とあり江戸深川靈巌寺中念佛堂に葬る

○

駕籠にのせられて

手を延て折行春の草木かな

手くり船風は柳に吹かせけり

○山松の間〱や花のくも

花の前に顔はづかしや旅衣

○ねふたかる人にな見えそ朝櫻

當麻まんだらを拜みて

衣かへ自ら織らぬ罪深し

そてかけて折らさし鹿の袋角

二王にもよりそふ蔦の茂り哉

小はらめや野分にひかふかゝへ帶

ある程の伊達しつくして紙衣哉

戀 地獄

鼻紙の間にしほむすみれ哉
○燕や巢の中せはき私語
駒鳥の聲ころひけり岩の上
□負た子に髮なぶらるゝ暑哉
はつれ〳〵栗にも似さる薄哉
△木枯やつゝゐて啼し猿の聲
別れても夜の有たけハ砧かな
せまり來て息ふく方や飛螢
夜嵐や太閤樣のさくら狩
あるほどの品を盡して火桶哉
ひつたもの頭なてゝる寒かな
玉笹の二ふし三節しみつ哉
色わひもわつかゝ春の夜明哉

僧千那

僧千那は近江堅田の人にして其邑の本福寺十二世の主なり法名を妙式人と稱す律師に任ず自ら號して蒲萄坊といへり
性聰敏明達なり時人稱して蕉門の迦葉といひしとかや
千那は慶安三年庚寅に生れ享保八年癸卯四月十七日に寂す享年七十有三

○

あふ阪のかたまる頭やはつ櫻
きさらきや身は思はねと押灸

聖德太子像
御袴のはつれなつかし紅の花

内秘菩薩行
夕立に踏なかへしそわたし舟
山鳥をやすめて鷹の別れ哉
忍ふ夜の蹕こそはき木葉哉
初雪や横川の杉の三分一
人を吐く息をならはん冬籠
軒近き岩梨折な猿の足

思ひ子を叱るゝ似たり雉の聲
ふく病につれなき霜の別哉
あつ衾夏の酒債と唄ひけり
蠅打てあとには詠められにけり
高燈籠晝はものうき柱かな
秋風や萩のりこえて波の音
木蓮花鈍き處を咲にけり
水涕ゝ誠見せけり御取越
いつまでか雪にまふれて鳴千鳥
扇折いかゝ持たる汗ぬくひ
唇ゝ墨つく兒の涼みかな
しくれきやならひかねたる魦舟
紙屑や出代のあとの物淋し
手を伸ていちこくひけり馬の上
舟曳の妻の唱歌か合歡の花

しからきや尉か家督の山いちご
それ〳〵のおはろの形や梅柳
皮むくもものむつかしき粽かな

菅沼曲翠

菅沼曲翠（或は曲水とも）通稱は外記馬指堂と號す近江の人にして家世膳所侯に仕ふ

曲翠幼より俳諧を好みて蕉門の領袖たり伯父幻住亦風騷の士なり

曲翠の同僚に曾我權太夫なるものあり君寵を恃みて威柄を弄せしかば衆皆切齒怨恨せざるはなし曲翠大に憂慮して竊に之を除かんとを計り一日事に托して己れの家に招致じ一々其姦曲を責讓して之を刺殺し已れも亦從容として屠腹せり蓋し其意君の過をあらはさんことを恐れ私怨を以て相戕害したるもの丶如くせるなり侯聞て大に怒り其子内記に自盡を命じ

且其家を沒せしかば闔藩の士民之を哀悼せざるものなりしとぞ
其妻某氏は和泉岸和田藩の士某の女なり曲翠死して後は落飾して破鏡と號せり蓋し破鏡不二再照一といへる詩句に取れるなり和泉の堺に幽栖して其從來好める所の和歌を詠じ又は箏を撫して一生を終れり嗚呼此夫にして此妻ありと謂ふべし
曲翠の死ハ享保五年七月某なり壽詳ならず

○

若楓茶色になるも一さかり
念入て冬からつぼむ椿かな
灌佛やつゝじ並ぶる井戸のやね
思ふことたまつてゐるか墓
川風のあやめ吹けり淀の町
若竹や烟の出る庫裡の窓
約束の萩ハ動けどあつさ哉

初雪や枯木の上に手鞠はと
馬叱る聲もかれの丶嵐かな

はせを庵

冬の日のひそかにもれてひはの花
菫草小鍋洗ひしあとやこれ

如住庵

木啄の柱をつゝくすまひ哉
一輪は誰か手の内に返り花
鶯や二升五合の藪年貢
口取も咳氣聲なり駒むかへ
早稲の香や田中の庵の人出入
物ことの御物に似たり相撲取

宿西塔

明星や尾上に消る鹿の聲
梟の啼やむ岨の若菜かな
なつ山や庵を見かけて二曲
面白やたゝかぬ時も鉢たゝき
水仙やねり塀われし日の透間

はとゝきす背中見てやる苧かな
何虫の這ふてや蕗の際つきぬ
◯剃立しつふり哀れに秋の風

僧惟然

僧惟然は廣瀬氏初め素牛と稱し鳥落人と號す又弁慶菴ともいへり美濃の人なり

家素富裕なりしが後には甚だ貧困に陷りたれども毫も意とせず風雅を愛して蕉門に遊べり時人呼びて俳諧の狂者と倣せり短褐破笠飄然として諸國を漂泊し到處紀行の吟あり途彥根を過るとき森川許六に其稿を與へていへるやう子宜しく次第すべしと許六之を諾して編次し天狗集と名づけり

或年西國に行脚せしとき播磨に知友ありて其門を敲きしに狂僧の常態と

して身に襤褸を纏ひたれば主人之を見て布一疋を與へぬ惟然大に喜び或旅店に投じて彼布を出し其主婦に一領の衣を製せんことを托し謝するに其剩餘を以てすべきことを約せり惟然翌朝新衣を着けて遽しく途に上りしが忽ち歸來りていへるやう新衣は纏ひ難し故衣の體に適せるに如かずとて復び弊衣を纏ひて立去れりとぞ又嘗て俳友某の家に宿せしに其主人頭日妻を迎へて室内の裝飾未撤せず衣桁には數多の衣服を掛つらねたり翌朝其家の下婢彼室に至り見るに惟然は已に去りて跡なし而して新婦の衣一領を失せり驚きて斯くと告くれば主人聞きて彼の廉潔なる吾其盜心あらざるを知る是必ず故あるべしとて其往けりと思へる家に就て問はしめたるに果して其所に在りて答ふるやう今朝昧爽に立出たるに冷風肌に透りて堪へがたかりし故に再び歸りて男女のわかちは辨へざれども纏ひ來れり此にてあらんとて美麗なる女衣を返せりとかや又何の年何の處にやありけん久しく滯留して籠居しけるを或人勸めて今夜某の家に俳諧の

會あり宜しくこれに赴くべしといひしかは惟然ハ笑ひつゝ吾日出でゝ起き日入りて休む喫茶飧飯まで行住坐臥みな俳諧なり然るを外に俳諧せよとは何事ぞやと答へたりとかや其曠達なること率此類なり

一女あり名古屋の商某に嫁す其家頗る富めり惟然鄕里を去りて諸國を巡歴する後ハ互に音信も絶えたりしが一日名古屋の市街にて端なくも行逢ひしにぞ女ハ二三の婢僕をも具せしが我を忘れて走寄り乞丐とも見紛ふべき父の袂に縋りて傍人にも愧ぢず泣きしかは惟然も懷かしとや思ひけん双眼に涙を浮べて「両袖に」の句を吟じなから跡をも見ずしてはせ去りしとぞ

或時蕉翁と共に逆旅に投せしとき木枕にて頭に痛みを覺へしかば帶を解きて其枕を卷き寢に就けり翁之を見て惟然は頭の奢りに家を喪ひしなりとて一笑されしと又僧丈草惟然の零落せる姿を見しとき貴僧は貧に高ぶりのつきたりといひしとぞ直に一奇話なり

風羅念佛と稱へて蕉翁の發句を和讃に作りゆく〳〵之を誦せり左に其一を擧げん

ますたのむ椎の木もあり夏木立音はあられかひの木笠南無阿彌陀

寶永七年庚甲五月二十一日寂す壽詳ならす

○

風呂敷に落よつゝまん夕雲雀

酒部屋に琴の音せよ窓の花

梅の花あの月なから折はやな

山吹や水にひたせるゑましい麥

かう居るも大切なるぞ花のかげ

我寺の藜は杖になりにけり

撫し子の其かしこさにうつくしさ

若業ふくさら〳〵〳〵と雨なから

かる〳〵と荷も撫し子の大井川

悼少年

粟の穂をこぼしてこゝらなく鶉

晩方の聲や碎るみそさゝゐ

かなしさや鹿木の箸もおとなふみ

ふけ行や水田の上の天の川

水鳥や向ふの岸へつういつい

木もわらん宿かせ雪の靜かさよ

ひだるさになれてよく寐る霜夜哉

臘八やけさ雑炊の蕪の味

凩や刈田のあとの鐵氣水

時雨けり走入けり晴にけり

長いぞや曾根の松風寒いぞや

二本松

まづ米の多いところて花の春

冬川や木の葉は黒き岩の間

彦山のはなはひこ〳〵小春哉

両袖よたゝ何となく時雨哉

○山の幅啼ひろけけりきしの聲
夕顔や淋しう凄き葉のならひ
肌寒きはしめゝ赤しそはの花
松茸や都ゝちかき山の味
水仙の花の亂や藪やしき
節季候や疊へ雖を追上る

智月尼 附乙州

智月尼ハ近江大津の人なり其子ゝ乙州あり母子共に蕉翁を師として俳諧を善くせり

或時尼ハ紙筆を備へ蕉翁に向て後の紀念となるべきものを書きて取らせたまへと請ひしかば翁ハうち頷きて六十ゝ餘れる老尼に紀念の品を望まれていとも心細しと戯れながら書きて與へられしとぞ然るに浪華の凶報ハ其年の事なりしかば尼ハ豫め翁の死期を知りて請ひたるものにやと人

々語りあへりとかや

尼は翁の歿後時々義仲寺に詣でゝ追善供養に心を用ひ絶えず香花を供へしとぞ

尼は寛永十年癸酉に生れ寶永三年丙戌に寂す享年七十又四乙州の生死年月は未詳ならず

○

有と無いと二本さしけりけしの花

我年のよるともしらす花さかり

廣庭にゆたかに開く牡丹かな

雲の間の星見てゐるゝ時鳥

麥わらの家してやらん雨蛙

晝顏や雨ふり足らぬ花の顏

おろ〳〵と向へは月の光り哉

二つあらはいさかひやせんけふの月

凩や色にも見えす散もせす

我なりも哀ゝ見ゆるかれ野哉

御火燒の盛物とるな村からす

春待や氷にましるちり芥

むかしこそ今ハ數へす年の暮

わさとさへ見に行旅やふしの雪

逢阪や花の梢の車うし

盆に死ぬ佛の中の佛かな

年よれは聲もかるゝそきり〳〵す

山つゝし海ゝ見よとや夕日影

手枕や月ハ布目のかやの内

山櫻ちるや小川の水車

悼嵐蘭

鳴出して米こはしけり稻雀

鶯に手もとやすめん流しもと

これてこそ命惜けれ櫻花

○溜池に蛙生るゝぬるみかな
○逢阪やいとゝせきせ合蟬の聲
濱風よねちあふ芥子の蓄哉
初茸の香よ降出す小雨かな
幽靈に水飲したか鉢たゝき
稻の花これを佛のみやけ哉
（以上智月）

○

水梨や幾秋の夜の露の味
鮎さひて石とかりたる川瀨哉
そはの花櫻の志賀の嵐かな
はせを葉やうちかへし行月の影
兄弟といふそ親子か老の秋
親子さはしらすもてなされて
○水鳥の浪に鼻つく眠かな
ぬきかくる羽織すかたの胡蝶哉

糸遊やにくき簾の人の影

朝つく日背中のひかる蛙かな

行秋を皷弓の糸の恨みかな

こきませる柳の枝やいと櫻

糸櫻虻はちかるゝ嵐かな

曉の目をさませとや蓮の花

虫よむし鳴て因果の盡るなら

森の蟬涼しき聲や暑き聲

空蟬となるまで鳴を仕事哉

馬かりて竹田の里や行しくれ

菜大根の土に喰つく寒さかな

雪れ北雨れ南よ冬至梅

てのまゝに罪つくる身の日は長し

晝の晝夜の夜しる冬至哉

海山の鳥鳴たつる吹雪哉

けし畑やちりしつまりて佛在世
見る所思ふところやはつさくら
春の夜も更て寒けき小提灯
段〳〵に塔の雪間の雫かな
畑にも腹ふくらかせ若たはこ
鉢たゝき哀れ顔に似ぬものか
夜を寒み乾鮭つたふ鼠かな
日枝一つ前に置たる雪見哉

以上乙州）

松倉嵐蘭

松倉嵐蘭は甚左衛門と稱す肥前島原の城主たりし松倉某の裔なり嵐蘭少ふして武技に長せり嘗て某侯に仕へしが故ありて祿を辭し江戸淺草に閑居す

性曠達にして榮辱を以て意に介せず其志す所は名利の外にありて蕉門の高潔の士なり

元祿六年の中秋月を由井ケ濱金澤灣に觀んとて杖を鎌倉に曳きしに其歸途より病を獲て其月の二十七日に歿す享年四十有餘谷中感應寺後に天王寺と改むの塔中に葬る

蕉翁嵐蘭の爲めに作れる誄あり左に之を摘抄す

金革を褥にして敢て撓まざるは士の志なり然るに文質偏ならざるをもて君子の功とす松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし老莊を魂にかけて風雅を肺肝の中にあそばしむ予とちなむこと十あまり九とせなりけるが此三年前つかた官を辭して中略過つる睦月ばかり稚子が手を取て予が草庵に來り彼に名附えさすべきよしをいふ王戎五歳の眼ざしうるはしと戎の一字をつみて嵐戎と名く其悅べる色いま目のあたりを去らず生る時むつましからぬをだになくてぞ入とは忍ばるゝ

よましてて父の如く子のごとく手の如く足のごとく年頃いひ馴むかひたる倸の愁ひ袂よ結ばれて枕も浮ぬべきばかりなり筆をとりて思そのべんとするよ才つたなくいいんとするに胸ふたがり唯おしまづきにかゝり夕べの空にむかふのみ

秋風に折てかなしき桑の杖

○

○小夜しぐれ隣へはいる傘の音
青くさき匂ひもゆかしけしの花
○すら〳〵と安くも立てり門の竹
、初市や雪に漕來る若菜船
、青柳よいよ〳〵眠る胡蝶哉
○きら〳〵と我類守る蛙かな
、衣かへそこつに帯を解にけり
○二本めの扇を下すあつさかな

●初汐や細い處に帆かけ船

煤はきの砧すさまし雪の上

〇水無月や朝めしくれぬ夕涼み

ヽ笑ふまも泣にも似たる木槿哉

春を何と凩のこまめ時雨の海老

身を庭前り朴の木によせて

渠（かれ）何を人目にうらみ朴の木そ

胡芋干宿よ夕顔の夕さもあらはあれ

炭はさむ音さへ氷るあした哉

若菜つまん三浦の大助百六つ

〇子やあかん其子の母も蚊のくはん

こゝろえぬ花見の顔や相撲取

白けしにはかなや蝶のねすみ色

〇澤瀉ぞ鱸の濁す澤邊かな

百舌鳥の啼野中の杭よ神無月

餅つきやあかりかねたる雛のとや

秋の坊

秋の坊はもと金澤藩の士なりしが夙に遁世の志を懐きて遂に祿を辭し薙髪して寂玄と稱せり

俳諧を嗜みて蕉翁の門に遊べり或年翁を石山の幻住庵に訪ひ一二夜滯留していと懇に物語をなし其歸るとき翁は山の麓まで見送り

やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲

といふ一句を吟じて無常迅速の理を教諭し袂を分たれしとぞ

秋の坊は元來北枝とは交り尤深かりしが何時の頃よりしてか吳越の間柄とはなれり一とせ蕉翁行脚して杖を金澤に留められしとき北枝は翁に謁せしが秋の坊には其事を告げざりしに秋の坊は他より聞き傳へて翁の寓舍に至り一坐の客と共に終日歡話(くわんわ)せり然るに北枝とは一言をも交へず又別に憤れる色もなかりしかば卓然たる氣象ありとて人々皆感じけるとぞ

ぞ
戒時京都に遊びて歸國せるとき折しも冬のことゝて雪降りて梢こほれるに三衣一鉢の外寒を防ぐものとてはあらざりしかば友人萬子ゟ炭を乞ふ爲め

　寒ければ山より下を飛ふ雁に物うち荷ふ人そこひしき

と讀みて寄せければ萬子は

　寒ければ山より下を飛ふ雁に物うち荷ふ人をこそやれ

といふ返しと共ゟ炭を贈り越しけるとぞ蓋し此和歌は炭の字を分解して讀みしものなり

秋の坊背ていふ風雅に遊ぶものは宜しく清貧なるべし死後に多く金穀の貯へあるが如きは甚だ鄙むべしと其終焉は正月四日（何れの年なるや未詳ならず）なりしが此日は俳友李東訪ひ來りて常の如く互ゟ物語せるに秋の坊は我今辭を作れり子聞くべしとて

正月四日よろづ此世を去によし
と口ずさみてさし俯くかと見えしが其まゝ息ハ絶えてけり李東ハこれを
見て驚きながらも其平生に違はざるを感嘆して
いねつむと見せて失けり秋の坊
斯く吟じて手向けしとかや

○

遠山や蜻蛉つい行つい歸る
太箸や太皷の役の持ハしめ
こかみ鳴や初めて物を取落し
畑うちてつれなの爺や川向ひ
鳥の巣に三月盡のあらし哉
松の葉をすゝりませけり心太
月夜にも闇にもなさて吹雪哉
凍つけは凍つきながら笹の風

夕くれや浮世のそらの風
ひとりたゝみたれそめてや鶉雲雀
小櫻とわろひす名乗る相撲哉
秋の蠅かうへむや〳〵足せゝり
月は田面海鳴そふる夜頃かな

病中

灯心の口のわれたるさむさ哉
またも見る闇かは花のあかりある

涼　苑

涼苑ハ其氏名を詳よせず伊勢山田の神職にして團友齋または神風館の號あり
常に乙由と友とし善し又蕉門よ在りて終始名を俘ふせり或年近郊の花を觀んとていで行きしまゝ歸らず人をして尋ねしむるに其行處を知らず然るに涼苑ハ途上より俄に思ひ立ちて京都に至り東山よ遊び夫より播磨よ

赴きて須賡寺の櫻を賞し終ゞ長崎まで行きしとぞ眞に雅人とこそいふべけれ

其臨終ゞ際して門人故舊辭世の句を請ひしかば凉菟ハ

合點や其わかつきの子規

といひつゝ復もや操返し曉のそのなるべしやとて再考の躰見えしかば乙由ハ傍より其曉の子規と高聲に呼はりて決意を與へたりとかや然るに或書にハ此事を荒誕無稽の説なりとして病中の吟なりといふ狂歌を載せたり曰く

今までは人かやむそと思ひしゞわか身の上にかくの仕合

前說眞に近しと思はるれども姑く附記して以て參考ゞ供ふ

凉菟ハ享保二年丁酉四月歿す壽未詳ならず

○

とり退て花のうしろや只一人

の音にはねかへる雪の竹
○梅か香や巨燵を去ること遠からす
○橋わたる人よしつまる蛙かな
土壁と共にくつるゝ蝸牛
しさの滯りなし田の青み
○時鳥〳〵とて寐いりけり
○つかむ手の裡を這たる螢哉
○袷着ていさそろ〳〵と出ありかふ
我宿やつい投上てふくあやめ
○人影のちらりと涼し竹の中
○うれしさや鬼灯ほとに初茄子
○身の上をたゝしほれけり女郎花
○名月や年よりくさき坐敷哉
○鹿の聲おとれ時雨てあけにけり
○鹿の音の呼出す杉の嵐かな

雨の手に美濃やあふみや鳴子引
青い葉をりんと殘して柚味噌哉
汁鍋のあとむつかしや冬籠
木枯の一日吹て居にけり
傾城の畠見たかる菫かな
大勢の手にあまりたる螢かな
何事を觸てまいるそむら燕
何事のあはたゝしさよ雉子の聲
かき上る石よしつむな蜆舟
水無月よあき物見せむ富士の雪
鞠はとかあれになりけり雲の峰
寐る人は寐させて月ハ晴にけり
最う木曾の望も寒し后の月
浴るかと枕に浪の音さむし

河合曾良

河合曾良は通稱を總五郎といふ信濃諏訪の人なり俳諧を嗜みて蕉門に遊べり或年翁の行脚に從ひ諸國を廻歴し其途中にて病に罹りしかば伊勢の長島なる知音の許に至りて療養せり然るに翁の旨に忤ひて相別れたりといふ說あれども恐らくハ非なり

曾良は寶永六年己丑十月に歿す享年未詳ならず

○

くりかへし麥の畝ぬふ胡蝶哉

春の夜は誰かはつ瀨の堂籠り

○柴部屋の北のへたてや梅の花

しら濱や何を木陰にほとゝきす

○松島や鶴に身をかれ郭公

○涼しさや此庵をさへすみすてし

、破垣やわさと鹿の子の通ひ路

、病む僧の庭はく梅の盛り哉

箱鳥や明離れ行二子山

夘の花に兼房見ゆる白髪哉

○波こえぬ契りありてやみさごの巣

月鉾や兒のひたいのうす化粧

、撫付し白髪のはねる秋の風

○ゆき〳〵て倒れふすとも萩の原

よもすから秋風ふくやうらの山

むつかしき柏子も見えす里神樂

○浦風や巴をくつす村千鳥

○雨よ寐て竹起かへる月見かな

雪は來でから風きはふ空淒し

向のよき家も月見るちきり哉

三日月の影はのかなる拔桒哉

はの〳〵と烏黒むや窓の春

かいまみのはなにはなつく枳売哉

勢ひわり氷きへては瀧津魚

こね返す道も師走の市のさま

おかみ伏し紅ゐ絞る汗ぬくひ

翁の墓に詣て、

鑑する人は神代のすかたかな

文箱の先摸様見るきぬくれり

原田宇古

原田宇古は大和郡山の人なり
幼より穎悟衆に超えて頗る俳諧を善くせり初め才麿に就きて學びしが後には蕉翁を師として師弟の親み極めて厚く翁の歿後といへども其追慕甚だ深かりしといふ
宇古は其生死年月詳ならず

翁の笑談思ふて
深川へ尋て
翁の墓に詣て
神儒佛

○

先かけは花の手柄や宿の梅
大原女に戀せは梅の花盛り
あつかしき竹の時雨や庵の跡
百鳥の跡ひく桃のすはへかな
鳴千鳥おきなの寐覺その聲か
一むかし數て拾ふ落葉かな
身よしむれ櫻さく日の念佛哉
虫干や臍の緒とかく母の筆
櫻の實山の木の間や身のらくさ
筆の墨しろけて黑しみすの蝶
四季の景月に見に來つ池の岸
梅のみか老松舞を神の面
花〱の花の花見ぬ花もなし
芹の酢に蕗の芽苦く酒甘し

僧李由

僧李由字ハ買年亮隅上人と稱す近江平田光明遍照寺十四世の主ょして律師に任づ越智性にして伊豫河野氏の流裔なり

常に點茶に耽り庭ょ四株の梅樹を植ゑて自ら四梅廬と號せり

夙ょ蕉翁の風雅を慕ひ其門ょ遊ばんことを翼へども輙く其志を遂ぐることを得ずしてうち過ぎしが一日法用に托して旅裝を整へ翁の草庵を訪ひ相見ることを得てより師弟の契り深く後年翁が幻住庵ょ客居の時にハ屢往きて俳事を問ひ又常に許六、支考と相交りて益を得る所多かりしとぞ」

李由は寛文元年辛丑に生れ寶永二年乙酉六月二十二日に寂す享年四十有五

○

明月[illegible]蕎麥の花にて明ょけり

稲むしろ近江の國の廣さかな

乞食のこといふて寝る夜の雪

躍るへき程にゝ酔ふて盆の月

草刈よそれか重いか萩の露

夕立やひし〳〵とやむ鳥の聲

水沸を吹きつて行ふゝきかな

小若衆に念しきわまる巨燵哉

水鳥の寐あたゝまるか静なり

いつの時人に落けん白牡丹

黒きもの一つれ空のひとり哉

菜の花を身うちに付てなく蛙

寒聲を引つる松のあらしかな

春近き三年味噌の名殘かな

鱈舟や比良より北れ雪けしき

雁金のむすひ合すや眞野堅田

行春に飽くや干鱈のむしり物

生蠶に袖をきつかふ夜寒哉
蛤の姿は見えす稲すゝめ
麥糞の土に落つく時雨かな
澤山に吹革祭のおこし炭
下萠のけしきをけすや春の雪
蓮にのる蛙は似たる空也哉
食物をしゐるも花のあるし哉
秋の野を遊ひはうけし薄かな
煤掃やゐろりにくれる唐辛子
出代や猫から先へ馴そむる
蚊の聲の中にいさかふ夫婦哉
朝寢して出れハ小春の天氣哉
袴着ぬ聟入もあり年のくれ

千代倉知足

千代倉知足は勘左衛門と稱す尾張鳴海驛の人なり其居を號して寂照庵又は蝸廬亭といへり

蕉翁を師として一家悉く風流に遊べり翁嘗ていふ鳴海は名古屋に近く桑名、大垣にも亦遠からざれば時に往來して餘生を送らんとて知足の家に杖をとゞめられしことありしが其家に傭使せる小童に習字の手本など書きて與へられ且我舊名は用ふることなしとありて其小童に甚七といふ名を授け其烏帽子親ともなられしとぞ

知足は晩年に多くの人の發句を集めて編みつゞらんことを企て專ら其事に從ひしに半途にて病死し志を果すことを得ざりしかば其子蝶羽遺志を繼ぎて遂に其功を奏せり其集を名づけて千鳥掛といふ

知足は寛永十六年己卯を以て生れ寶永元年甲申四月十三日に歿す享年六十又

六　○

寐て起て喰てはごする桑子哉

蜻蛉の顔は大かた目玉かな

問引菜の露提て來る目籠かな

花を吹し風かたまりて櫻の實

から風や吹程吹て霜白し

手習の師匠へ一把大根引

蕗茗荷果報くらへの家居かな

五月雨は下へ流れて川もなし

百姓の二男三男それ〳〵に仕置たるわたましに

凡兆

凡兆は其氏名を詳にせず加賀金澤の産にして京師に住し醫を業とせり夙に風雅を好みて其妻羽紅と共に蕉門に遊び後年猿簑集の選に加はる凡兆不幸にして罪を犯せる徒と交り是が爲めに疑ひを受けて其身も亦獄に繫がれしが既にして其全く關係なきこと明白したる故に縲絏の辱しめ

を脱るゝことを得たりされども此時よりして世を厭ふの心や生じけん何時(いつ)しか亡命(ばうめい)して終に其往くところを知らず

○

鶯や下駄の歯につく小田の土

下京や雪つむ上の夜の雨

わたりかけて藻の花のぞく流哉

せり上て苔をこはすあふひかな

市中はもの丶匂ひや夏の月

長〳〵と川一すぢや雪の原

骨柴のかられながらも木芽哉

灰汁桶の雫やみけりき〳〵す

五月雨に家ふり捨てなめくじり

初しほや鳴戸の浪の飛脚舟

世の中は鶺鴒の尾のひまもなし

鵙なくや入日さしこむ小まつ原

◎田の水の有丈氷るあした哉

○物の音ひとり倒るゝかゝしかな

こきませて雪の都を岡見哉

海山もさみたれそふや一くらみ

灰すてゝ白梅うるむ垣根哉

水無月も鼻つき合す數奇屋哉

白かりし花はむかしにたね瓢

しくるゝや黒木つむ家の窓明り

○馬の息はのかゝ白し今朝の霜

禪寺に松の落葉や神無月

門前の小家も遊ふ冬至かな

砂よけの海のかたへや冬木立

○凩や廊下のしたの村すゝめ

ヽ古寺の簀子も青し冬かまへ

い炭竈に手負の猪の倒れけり

ある僧の嫌ひし花の都哉

っ花ちるや伽藍の樞おとし行

鸛の巣の檀の枯枝に日は入ぬ

天野桃隣

天野桃隣は後に桃翁と改む通稱は藤太夫伊賀上野の人にして太白堂、呉竹軒、五無庵等の別號あり

壯年の時致仕して江戸に來り神田に住して蕉翁に從遊せり其發句の風調淡泊なるは是其特色なりとす

元祿年間陸奥に行脚せり其紀行をむつ千鳥と名づく山口素堂の跋文あり

嘗て蕉翁に從ひ江島に遊びしとき藤澤驛に投宿す折しも其逆旅の妻產に臨めり主人ハ翁等を法師なりと誤認し二人の室に來り妻なるもの產のきざしありて痛く難(なや)めり幸に安產の符を賜はらんことを請ふといひければ

桃隣いと易きとなりとて何やらん書きしるして與へたるに暫くして再び來り速に安産したりとて九拜し厚く謝して退けり翁は桃隣に向て何を書き與へしやと問はれければ「とくいてゝ」の一句をしるしたるありと答へたり翁はこれを聞き子い道を得たるものなりとて大に稱嘆せられしとかや又一奇話あり或家に賓客を饗することありて桃隣も其相伴に招かれしが時しも熱暑の候とて一室毎に盥水を備へ新しき手巾を添へ置きしに客去りて後其手巾悉く見へざりしかば家人はこれを異みゐしよ一両日を過ぎて桃隣より謝書を送り來り其末に「かへるさに」の一句を書添へありしかば始めて其日の偷兒を知り得たりとぞ

桃隣は享保四年己亥十二月九日に歿す壽詳ならず江戸淺草新寺町新光明寺に葬る

○

道くたり拾ひあつめてかゝし哉

七草やついてにたゝく鳥の骨

世を背く野菊や百の名に入らす

白桃や雫もおちす水の上

初雪や人のきけんは朝の内

ゝ開まてれ二階に寐たり時鳥

○かれはりに顔かゝれなよ橋の上

、雪消て大聲わくる小鳥かな

首途

いつくまて花の呼出す晝狐

鹿島高天原

鬼の血といふその土かつゝち哉

土浦の花や手にとるつくは山

汲む鮎の網よ花なし櫻川

日光

雲水やかすまぬ瀧のうら表

歸るさに手拭ぬすむ暑さ哉

石臼も庭になれたし苔の花

慕うたぬ人のこゝろや梅の花

夕立れ繪にかく雨の姿かな

取上てそつと戻すや鶉の巣

五月雨の色や淀川大和川

打過て又秋もよし梅もみち

煤けたる鵜飼か顔や朝朗

石川や簗うつ時の薄濁り

鹿の子のあとない顔や山畠

とく出てまた乙見せよ花の兄

散ときをさはかぬ梅の一重かな

木つゝきのつゝきからすや蝸牛

三日月やはや手よさはる草の露

蓑むしを聞ぬそけふの命かな

飛鹿も寐てゐる鹿もおもひ哉

牛の行道は枯野のはしめかな

生玉琴風

生玉琴風は別號を如蘿架といひて大阪の人なり俳諧を喜び江戸に來りて蕉翁に師事し翁歿して後は其角に從學し達吟の名を得て世に琴風、百里と並稱せらる琴風は享保十二年丁未二月七日を以て歿す享年詳ならず江戸本所押上春慶寺に葬る

辭世

○

篝火に見ゆや鵜飼の貝はかり
一いきに此あぢはひそ春の水
鍵持のふりまいさる、野分哉
福壽草たゝにめて度ねさし哉
かいすくみいつも寐良の鵜哉
いく程そ日南追ひ行秋の蠅

みゝつくの眠り落たる柳哉
家小共に引出物せん藏ひらき
寒食やいはけなき子にすねらるゝ
蔦枯て壁をぬりたす菴かな
宿からん眞晝をおろす諸ひばり
いざや蝶重き身するも舞の袖
帆はしらのつらゝ見えすく旭哉
川越せし馬の尾ゝ幾氷柱かな

寄布袋蝶

路通

路通は何の處の人なるを知らず又其氏名を詳にせず或はいふ美濃或説には大阪人にして八十村を氏とせりと。
少かりしとき遊蕩に耽りて産を破り終に乞丐とまで零落せしが或年近江にて蕉翁の行脚に邂逅し端なく談風流のことに及びしかば路通は豫て好

める道とて
露と見るうき世を旅のまゝならは何處も草のまくらあらまし
といふ一首の和歌を扇子に書きて翁に示せしに其書も亦頗る觀るべけれ
ば翁は大に感嘆していへるやう我も往昔仕官せし時京都の北村季吟に就
きて和歌を學びたりしが今ハ俳諧にのみ專ら心を寄せて生涯の樂みとな
せり汝我に從遊するに意なきやとありて此時路通の名をあたへられしと
なむ然るに其人と爲り輕薄にして後年翁の旨に忤ふことありしが爲め其
門を放逐せられしが翁は臨終に際して其罪を赦されたり其事は翁が曾沼
曲水に寄せられたる書簡にて明白なれば左に之を載す
路通事大阪にて還俗いたしたるとの事其志三年以前より見へ來ると
にて今更驚くに足らず迚も西行、能因の眞似は成まじく候へば平生
の人にて候常の人が常の事を爲すに何の不都合かあるべきや拙者に
於て不通仕まじく候俗になり候ても風雅の助けにもなり候はんいむ

Digitized by Google

かしの乞食よりハ勝り可申候　　ばせを

二月十八日

曲水様

路通の生死年月は未詳ならず

○

摘すてゝ踏付かたき若菜哉

はせを葉ハ何よあれとや秋の風

彼岸前寒さも一夜二夜かな

鴫の巣の見えたりあるハかくれたり

うるはしき稲の穂波の朝日哉

夕闇にそばさく方や引板の音

蘆の穂や招くあはれにちる哀れ

時雨氣のなふて一日小春かな

初雪やまつ草履にて隣まで

火桶抱て顋髯をかくしけり

塞垢離の肌生白く哀れさよ

いね〱と人にいはれつ年の暮

いやはかおすてる庵の菊の苗

伏見夜船

ほのくぼに雁落かゝる霜夜哉

出草庵

消る時は氷もさえて走るなり

ふるかれや神樂拍子に神樂聲

山椒のからく皮はく浮世哉

殘菊はまことの菊の心かな

しやんとして千草の中にわれもかう

白山の雪やなたれて櫻麻

姉と弟もうけたる人に

まつ二人雛からふへて織まで

元朝や何となけれと遲さくら

難波江

ゆかしさはいくつ角出す濱の蘆

草枕虻をおさへてねさめけり

上野
花鳥よならぶ栢の古ばかな
の大佛うしろに花のさかり哉
肌のよき石よ眠らん花の山
鉢叩き叩きをさめのよを聞ん
目にたつや海青〱と北の秋
老を啼うくひす思へきのふけふ

僧勾空

僧勾空は柳陰軒と號す加賀卯辰山の心蓮舍に住せり夙に風雅を好みて蕉翁を師とし仰げり翁嘗て北國行脚の時卯辰山の草庵よ暫く杖を留めて旅中の勞を休められしことわり其後翁幻住庵に客居のとき勾空が畫ける兼好法師の像に賛して

秋の色糠みそ壷もなかり鳬

と題されけるとかや此句の意味い彼の兼好の徒然草に世を捨人はうき世

の妄愚を拂ひ捨て糂粏瓶ひとつも持まじきとあるを取りて秋氣零落のさまを述べたるものなりといへり

勾空の生死年月は未詳ならず

○

思ふこと侍る頃 うらめしき世に芽を出すや葛の蔓
山吹や箔椀あらふ里の川
はし鱈のしらみはろつく春日影
梅か香やわけ入る里は牛の角
うつむいてきけは草なる雲雀哉
簑虫の家くつしたる野分哉
時〳〵に寐言かましやよるの蟬
蟬のからに働くやうて哀れ也
さく〳〵に只さく〳〵に野菊哉
吹からに鹿そうそむく山下風

阪本
草庵
上已

青柳よ追出されたる燕かな
凉しさや先蛤の口の砂
凉み〳〵行く〳〵森の田中哉
顔見せぬ居もこゝらや時鳥
虫ともの哀れをつくす夜中哉
面白や海にむかへは山さくら
三日月の光や浮ても〳〵の花
客ありといそかしかるや盆のうち
蠅はとるものと思へと大師講
藤咲て庵の樣になかかりけり
折角とゆかしからせよ月の雨

杜國

杜國は俗稱を錺屋平兵衛といひて尾張名古屋の人なり自ら岩菊丸と號す

貞享年間蕉翁に扈從して芳野山ゟ遊びしとき郡山を過ぎて原田宇古の家ゟ宿り三詠の歌仙ありたりとぞ

或年事に坐して已ゟ死刑に決せしが是より先きに「蓬萊や」の句を吟せしを偶其大守の聞く所となりて大に感稱され爲めに死一等を減じて三河の伊良古崎ゟ流さる

杜國は元祿三年庚午五月二十六日病で配所に歿す享年詳ならず

○

○長閑さにものも思はぬ朝寐哉

似合しき芥子の一へや須磨の里

八重霞奥まて見える龍田かな

荒鷹の羽風ゟ動く灯影哉

つゝみかねて月取落す霞かな

高野

ちる花に髻ハちりけり奥の院

○霜の朝栴檀の實のこぼれけり

送別
○この頃の氷ふみわる名殘哉
○馬はぬれ牛は夕日の北時雨
○うれしさは葉かくれ梅の一つ哉
○洗濯の袖に蟬なく夕日かな
蓬萊や御國のかざりひのき山

澤露川

澤露川は伊賀の商賈某の子なり長じて尾張名古屋に住し藤屋市郎右衛門と稱す月空又は月窓の別號あり
夙に俳諧を嗜みて蕉門の耆宿なり時人稱して金澤に北枝あり名古屋に露川ありといひしとかや
蕉翁の歿後に私見を立て異說を唱へしかば支考文を寄せて之を詰責せり名づけて露川責といふ然るに露川も亦答書を作りて其嘲りを解けりこれを合歡と稱す

露川は寛保三年癸亥に歿す壽詳ならず

○

蟬なくや鰈てこけるぬくひ板

そやされて咲ぬ梢も木の芽哉

草の葉に出てあけ壁の蛬

さびしさの腸赤し唐辛子

榾の火や煖よなくきり〳〵す

はせをはや在家の中の淨土寺

分別をはなれて海の月夜かな

年の尾をふみちぎられな葉竹賣

生海鼠哉夜か明たやら暮たやら

名聞を襟に殘して紙こかな

冬籠蚊屋の釣手の團かな

夜あらしよ中てかたまる霰哉

時鳥雲蹈はつし〳〵

逢翁

行〳〵子なくや轡の音馬の鈴
奥底もなくて冬木の梢哉
買て行塗長持や稲の花
鼻の聲不性さよおはろ月
梅か丶の入りわたりてや朧月
雷をしつめてたゝく水鶏哉
翡翠や羽を糊ふて水かゝみ
脇ひらも見すに咲たる桔梗哉
来年れ〳〵とて暮よけり
梅か香よ智恵計られて初音哉
忘れすにゐてや梢の歸り花
煤萱の中から白し水仙花
吹上る空よ木葉や初送
有てなき角おもしろや蝸牛
出そろふや稲の田つらのさんさ降

草刈の道〳〵こぼす野菊かな

わたましや先へ來てゐる蟋蟀

中川乙由

中川乙由はもと慶德圖書といひて伊勢山田の神官なり後に氏名を變じて中川梅我と稱し再び名を改めて乙由といへり

夙に隱遁の志ありて凡俗の士と交はるを嫌ひ草庵を麥圃の間に結び其中に住して自ら麥林舍と號せり一日客あり問て曰く我俳諧を學ばんことを欲すれども其能し難きを恐る愚者も亦道に入ることを得べきかと乙由之に答へて曰く志を立つるの如何に由るのみ何ぞ必ずしも難しといはんやと又問ふ如何やうの事を詠ずべきか乙由答へて曰く唯眼前の狀態を詠ずるのみと然らば試に一句作りて示したまへと請ふにぞ折しも冬の半にて面のあたり農夫の鍬を肩にし圃場に赴くのさまいとも寒げに見ゆるにぞ

「百姓の」の句を吟じたりとなむ

乙由は蕉門の後進にして翁の歿後は支考、涼菟等に諂り其晩年の格調は能く正風の眞髓を得たり又附合ば其最も長ずる所なるが或日涼菟を判者として支考と共に會を催したるとき乙由は

老僧の顔を佛師に見せておく

といふ句を發せしかば迚もこれを壓倒すべき名句を得べしとも思はざりけん衆皆畏れを懐きて見えけるよ釋教はさし合ありとて執筆より其句を返しければ各こゝに勢を得て俄に喜色を顯はし旣にして一おもて過行きて

拭ふて取た板はかゝみよ

といふ前句出でたる時支考は大聲に

老僧の顔を佛師に見せておく

といひしかば傍よりこれを咎めり然るに支考は名句のすたらんことを恐

れてなりと答へけるよしいと面白き談柄ならずや
乙由は常に花街に赴き劇場に遊ぶの癖ありしが一日其昵む所の妓を携へて演劇を觀覽し其翌日は獨行したるに彼の妓も亦他の客と共に場に在りて糕菓など贈り越しければ此時ふ彼の人口ふ膾炙する「浮草や」の一句を吟じたりとかや

乙由は元文三年戊午八月十八日に歿す享年詳ならず

〇

○花まかぬ身をすはめたる柳哉
○よき物を笑ひ出しけり山櫻
九年母は尻もくさらす秋暮ぬ
○燕や何をわすれて中かへり
○うき草やけふいあちらの岸にさく
若水や老をわすれて筒井つゝ
ふりそゝく水に七草分れけり

十八町奥に里ありね梅の花
老僧よ死きらひありねはん像
摘た手に杵ははつかし蓬餅
ほとゝきす一夜〳〵の月の缺
閑子鳥我も淋しひか飛て行
泥足の京てかれくやあやめ賣
若竹や雪の重みれまたしらす
間〳〵よ良見合せて田うゑ哉
夕良や秋れ扇にのせられす
肌寒き始や星の別れより
鹿の聲心に角れなかりけり
物いれぬ人そろふたり秋の暮
祖父婆の京よも多き十夜哉
吹れきて畑へ上る千とりかゐ
はてれ皆扇の骨や秋のかせ

けさはまつ風わすれて衣かへ
り百姓の鍬かたけ行さむさかな
〇行秋を道〳〵こほす紅葉かな
天の戸に朝寐れあらし初日影
眼鏡またなくさみゝしや初暦
かさゝきの橋や崩れて明烏
此道へ迷ふたもよし草の花
寒菊は雪を崩して咲よけり

高野百里

高野百里名は勝春字は文館雷堂と號す江戸小田原町の魚商なり初め素門に遊びしときは茅風と稱せしが後服部嵐雪に従て百里と改めたり
平野杉風と友とし善し當時生玉琴風と名を伴ふせしが三十餘年間一日も俳諧に遊ばざることなかりしとぞ其熱心なること想ふべし

家富みて奢侈を好み食物の調理を善くせり又酒を嗜むるとよ妙を得終日終夜といへども其定度を差へざりしとぞ

寳永の末よ不知火を觀んとて築紫に遊びしが其紀行中には秀吟頗る多し」

百里は寛文六年丙午を以て生れ享保十二年丁未五月二日よ歿す享年六十有二

入道

○

埋火や聞耳たつるねつみ罠

蕣や片庇ふる玄關前

手繰縄のくるしや賤か芋の売

けふ菊よ仙臺鍋の覧かな

うけかたき身を喜へや生身玉

一つある家も枯野のへの字かな

みめかたち女の鬼かかつたふり

蛸壺やおのれ蓋よて五月闇

松並よ櫛を入れたる須磨の夏

佃島
雲のみねうねり上せよ土用波

なる神や忽ち青き唐辛子

しらぬ火やまつ後の世に入る心

辭世
死でおいて涼しき月を見るぞかし

一拍子ぬけた良なり衣かへ

修羅道
辻〱に切ちらしたる西瓜哉

白粥の白すきにけり後の月

蚊遣火や結ひかけたる縄のれん

雷の撥のうわさや花八手

霜朝の禰宜のしはふき神さひぬ

天道
稲妻のわつかに笑ふ契り哉

夕立や炊くけふりをつれて行

地獄
落鮎や火振暇なき水の色

餓鬼
子を捨る長者の門や高灯籠

背笠や男若弱たる花の山

くゝ立や五條あたりの立女
鮟鱇は居間へも押て参けり

牧童

牧童は加賀の人にして金澤ニ住し研刀を業とせり
弟北枝と共に蕉門に遊びて老手の聞えあり支考が撰びたる傳あれば左に
其要項を抄記すべし

牧童は彼が兄にして北枝は此が弟なり素ゟ謝公が才能を爭はざれば嘗て阮家の富貴をも羨ます中畧むかしは梅翁の風流をしたひけるも中頃蕉門に入て時の雅に遊べる心おなじからずたとへば一つ巣を生立ぬる鳥の彼は梅の花の清きに囀り此ハ卯の花の曇れるによる中畧吟席交會この人をしらずといふことなし時に居眠りを以て生涯の得物とせり或時は欄干の花にそむき或時は檐外の鳥を聞ながら眠る云

々

牧童の生死年月未詳ならず

○

○蓋すれは出て行蠅の羽音哉

待霄をまつ賞せはや年の程

開しき雲に日影の枯野かな

ねきりはる心長さよ年の市

膝元に月こそいつれ網代守

蚊柱のきははの〳〵と三日の月

、けいはくを申盡して歳暮哉

渡邊のどこへ〳〵とぬくめ鳥

○椽におく手燭にさはる落葉哉

川わたる音や落葉に高足駄

雨雲のさはけて風の柳かな

のとかさに又かかりそむる酒債哉

若殿を抱て又うつ舞かな
並松やこなたへ出る雁のつら
花薄戸よはさまれし夜風哉
朝顔やきのふは五つけふは三つ
鶯鳴て秋の日よわき曇り哉
すいと行水きは涼しとふ螢
いそかしき雲よ日蔭の枯野哉

山本荷兮

山本荷兮は橿木堂と號す尾張名古屋の人なり
蕉門中屈指の人物なりしも晩年に至り橋守と稱する書を著はしたる爲め
蕉翁の意を損せしとかや
荷兮の生死年月は未詳ならず
○

待燃

春めくや人さま〲の伊勢參り

朝日二分柳のうごく匂ひかな

こぬ殿を唐黍て見おろさん

木枯に二日の月も吹ちるか

蔦の葉や殘らす動く秋の風

鶯や竹の古葉を踏おとし

面梶や明石のとまり時鳥

されいこそ櫻なくても花の春

梅一里觀音寺には鐘の聲

鵜のつらに篝こほれて哀れ也

あた花の小瓜と見ゆる契り哉

悼人子

新らしき茶袋一つ冬こもり

朝顔の白きい露も見えぬなり

○蓮池の深さわするゝ浮葉かな

○曉のつるべにあかる椿かな

○しん〳〵と梅ちりかゝる庭火哉
籔の陰かたいみの梅めつらしや
いれけなや屠蘇嘗初る人次第
ゝまつ明て野の末ひくき霞かな
霜月や鶴のつく〳〵ならひゐて
の稲妻よ大佛拝む野中かな
寒月や居合敎る葭かこひ
白露や指にいさまる宇津の山
蜀黍の陰をわたるや露時雨
けふの日やついでよ洗ふ佛達
ゝ思ふこと流れて通る清水哉
嵯峨まていみことと歩みぬ花盛り
あやめふく軒さへ餘所のついて哉
見る人もたしなき月の夕かな
ぬつくりと雪車に乘たる憎さ哉

初月

宮崎荊口

宮崎荊口は美濃大垣藩の士なり致仕して俳名を東字と稱し後よ荊口と改めり

荊口は蕉門の老手なり其子に此筋、千川の二人あり亦皆俳諧を善くせり」

荊口の生死年月は未詳ならず

○

藪畔や穗麥にとゝく藤の花

晴ぬりや簑ふりすゝく流れ川

鷄の尾につられけり初あらし

白露や我鼻ねふる牛の舌

たへ立よ麥の中より歸る雁

物よわき草の坐とりや春の雨

祠たつ野中の藪や露時雨

鴆の巣や螢もかかりの足やすめ
初霜や七夜の朝の樽肴
虫の喰夏菜とはしや寺畑
夕立に青葉か上の若葉哉
牛の子の角や待らん年忘
梅さくやまたひを虫の朝力
行春や麓に落す馬糞鷹
筏士のうくゐとらゆる濁り哉
七夕や戸障子立る夜半過
古郷に高い杉あり初時雨

俳諧名家列傳附句抄正篇畢

俳諧名家列傳附句抄續篇

有耶無耶樓主人編

荒木田守武

荒木田守武は伊勢内宮の神職にして薗田長官中川平太夫といへり守武幼より穎悟衆に超えて和歌連歌を善くし一世に名あり嘗て或連歌の席にて己れを除く外は皆僧形の人のみなれば

御座敷を見れば何れもかみな月

といひたるに宗祇法師傍に在りて

ひとりしくれのふり烏帽子着て

と附けしとかやいとも興ある談柄なり

大永年中に童子教誡の爲めにとて一夜百首を作り毎首「世の中」の二字

押せり時人これを世の中百首と稱し又伊勢論語ともいへり

守武は俳諧の鼻祖にして天文九年の冬獨吟千句を爲せしが其自撰の跋文に俳諧とてみだりにし笑はせんとばかりはいかむ花實を備へ風流にしてしかも一句たゞしくさておかしくあらんやうにと世々の好士の敎なり云々とあり實に百世の規範なり

守武は文明五年癸巳に生れ天文十八年己酉八月八日に歿す享年七十有七

○

元日や神代の事も思はるゝ

青柳の眉かく岸の額かな

ちる花を南無阿弥陀佛とゆふへ哉

勢子のもの來へき宵なりとまる狩

鶯の捨子ならなけほとゝきす

ちる音は花も及はぬ木の葉哉

飛梅やかろ〳〵しくも神の春

◎落花枝よかへると見れハ胡蝶哉
梅そめハこぬ春まねて袂かな
錦かとおさめにはそき小萩哉
◎撫子や夏野の原の落し種
朝良にけふハ見ゆらん浮世哉

宗祇法師

宗祇法師は紀伊の人よして姓は三善飯尾氏自然齋、種玉庵、不審齋は其別號なり
性風流を好みて和歌を善くし又連歌よ巧みなり
常に定まれる居とてはなく生涯諸國を巡歷して東ハ奥羽より西ハ九州に至るまで足跡殆んど全國に遍かりしとぞ
宗祇ハ應永二十八年辛丑に生れ文龜二年壬戌七月三十日相摸箱根山麓湯本の

客舍に寂す享年八十有二辭世の歌に曰く
はかなしや鶴の林の烟にもたちおくれぬる身てそ恨むれ

○

山姫の思いぬ枝か薄もみち
世にふるいさらゝ時雨のやとり哉
春雨をわは緒によれる柳かな
もみちせぬ心や雪をまつの色
糸遊ふ空もみとりのやなき哉
一とせの月を曇らす今宵かな

宗長法師

宗長法師は駿河島田の人にして鍛冶工某の子なり
十八歲の時宗祇の門に入りて和歌連歌を學べるゝ天資聰敏にして一を聞
て十を悟れりとぞされば宗祇遷化して後に同門擧つて天下花の下宗匠た

るべしと勸めけれども辭して肯はざりしに勅諚ありて竟に其跡を繼げり眞に名譽のことなり

壯歳紫野大德寺の一休禪師に從て法を受く駿河の今川義忠其臣齋藤安元をして宗長の庵を領内泉ヶ谷に移さしむ此地たる山谷の眺望四季の景色尤佳絶なり其庵を柴屋軒と號す是即ち今の柴屋寺なり

宗長は文安五年戊辰に生れ享祿五年壬辰三月寂す享年八十有五

○

鈴鹿山いろ／＼になる心かな

蔦楓みる／＼しける軒端哉

影うつす梅か香深し岩淸水

風たにも過かてにする柳かな

いく村も川つら靑むさし柳

をしむへき月日も花の盛り哉

中にかつ心とき花や初さくら

水鷄なく留木深きやなき柳
日も涼し水ハ岩こす河原風
ちるもみぬ下葉數そふ柳かな
散て我はらふ砌のやなき哉
秋の草ひとつ花なき盛り哉
小萩原月を殘さぬ露もなし
月こよひ塵はかりたに雲もなし
朝露ハさりけなき夜の野分哉
いつれけさつはむか上の菊の露
見れハ雲開けはしくる丶山路哉
聲遠し月や潮干の濱千鳥
をしむとハ春にしらせし年の暮
夕時雨そめすやハあらぬ秋の海
山さくらおもふ色そふ霞かな
橘の香よせ丶られて寐ぬ夜哉

いく若葉はやし初の園の竹

山崎宗鑑

山崎宗鑑は近江の人にして俗稱は支那彌三郎範重といふ世足利氏の臣なり延徳元年己酉將軍義熙薨じければ宗鑑深く哀悼して薙髪し山城の山崎に隱遁せり晩年西國に赴き歸路讃岐琴平山の麓に止まりて草庵を結び此に住す名づけて一夜庵といへり

夙に能書の聞へあり又和歌連歌に達し且俳諧に長せり嘗て宗長と共に逍遙院殿實隆卿に伺候せしことは世人の能く知れる所なり

宗鑑は寛正四年癸未に生れ天文二十一年壬子に歿す享年八十有九

辭世の狂歌あり左にこれを記す

宗鑑は何處へと人の問ならばちと用ありてあの世へといへ

○

いやめなる子供うみおけ子規

天神そ梅にましたる花もなし

花の香をぬすみてはしる嵐哉

月に柄をさしたらばよき團扇哉

筆ひちてむすびし文字の吉書哉

元朝の見るものよせん富士の山

澁柹はおのか手そめかむらもみち

氷皆氷魚と化す夜か水の色

手をついて歌申上る蛙かな

聲なくは鷺こそ雪の一つくね

苦〳〵しいつまて嵐ふきのとう

笠を着れ雨にも出よ夜半の月

摺小木にしらるな蓼の花さかり

春寒き年

杉田勾當

杉田勾當は望一と稱す伊勢山田の人にして神路山の麓に住せり初めは守武の俳風を慕ひしが後には貞德の添削を受けしとぞ頗る俳諧に巧にして其門に美津女を出せり

勾當は我朝の師曠とも謂ふべき人にして十二律の聲調を聽き物の善惡を判斷する術を得たりと云ふ

勾當は天文十七年戊申に生れ寛永七年庚午六月に歿す享年八十有三

○

それときくそら耳もが子規

一番に耳より年そとりのこゑ

花を見ぬ人は人かい犬さくら

くもるなよ名は末代の秋の月

鶯も初音に口やあきの方

熱田萬句

さく花の兄ハ兄はと色香哉

五月雨はつゝみやきれし天の川

夜寒さをめくめ熱田のかみ衾

おのつから鶯籠や園の竹

去年よりもそやし立けり今朝の春

鳴聲は蚊のすねに似ぬ夕かな

年越る脚おとするや今朝の雨

秋風の次にくりたる古すたれ

松永貞德

松永貞德幼名は勝熊既に長じても猶髫を束ね童服を着け自ら呼て延陀丸また長頭丸といへり後に吉右衛門と改む逍遙軒は其號なり彈正久秀の孫にして父ハ永種と稱す

雄辯にして講談よ名あり又和歌連歌を好みて玄旨法印を師とし長嘯子を

友とせり或年俳諧花の本の稱を免許ありしかば俳偕式目を定めてこれを御傘と名づけり其後堯然親王より大佛殿の南方に若干の土地を賜はりければこれを柿園と號して其中に蘆の丸屋（蘆葺を以て營む故に此名あり）を營めりとぞ

貞德は元龜二年（辛未）に生れ承應二年（癸巳）十一月十五日に歿す享年八十有三鳥羽寶相寺葬る私に諡して明心居士といふ

其著はす所の書に和歌寶珠、歌林樸樕、戴恩記、貞德家集、慰章、百人一首抄、御傘、紅梅千句、淀川油粕等あり

○

△鬼は外ふくは春風としの内

雪打は夏にせばやの遊ひ哉

よめならは見とりにせはや柳髮

つかぬ鐘にひゞくはとふるしもく哉

かりかねは秋風樂のことち哉

鳳凰も出よのどけき酉の年

櫻鯛にてはまさりけり紅葉鮒
ひつきてふ最初いつれのおはん時
花見せんいさやあみたの光り堂
草も木もめてたさう也けさの春
蚤蚊をも殺さて殺せわかこゝろ
信あれはこれも飛梅のきとく哉
皆人のひるねの種や秋の月
しはるゝは何か杏の花のいろ
はつ寅の泥障てまいれ鞍馬寺
秋の野を手にさけて行虫籠哉
あとふらでやしなひたてよ花の雨
雪月花一度に見する卯木哉
冬籠虫けらまても穴かしこ
めり〳〵と落葉ハ何をかみな月
ねふらせて養ひたてよ花の雨

朝鷹や出るも戻るもふくらかり

野々口立圃

野々口立圃名ハ親重通稱ハ宗左衛門丹波保津の人にして弓馬の家に生れしが其跡を韜晦して京師に住し雛工となり因て雛屋市兵衛と稱せり少かりしきとより才藝人に勝れて書法は尊朝親王より傳はり書則ハ狩野探幽より受く俳諧ハ其最も長ずる所にして貞門七俳仙の一に居れり又常に烏丸亞相に親炙して和歌の道にも通せりとぞ
立圃ハ慶長四年己亥に生れ寛文九年己酉九月に歿す享年七十有一
其著はす所に嚔草其他俳書若干ありといふ

○

山の鳥も立およきせり霧の海
富士垢離やいつくも雪の流れ川

夏の夜ハなとはやくせの月の弓

白玉か何ぞと問へハむくけ哉

ゆつり葉や次第に家の大かざり

月影を汲てはしけり手水鉢

山姥とつひにハ名にやたつた姫

つちのとの實入を祝へ藏開

手向ぬる花や九品の淨土經

庭にさへさぞな落葉ハ東山

行水や汗もはこりも夕はらひ

見ぬ人ハ嫐うら山の雪の景

要法寺よて

法華經に似たる進のまき葉哉

仝

露毎よ分身ならし日の御影

八專のふるをな似せそ花の雨

辭世

月雪の三句目を今しる世かな

松江重頼

松江重頼ハ大文字屋治右衛門といひて京都の人なり其俳名ハ初め江翁と稱し後ニ維舟と改む

松永貞德の門に遊びて野々口立圃と名を伴ふせり重頼ハ天性跋扈にして屢次同門の士と爭論し絶交を爲したることあり是が爲めに巳れも亦遂ニ師の門より放逐されしといふ

重頼ハ慶長十二年丁未に生れ延寶八年庚申六月廿九日に歿す享年七十有四

○

松島や日のもとの本月のもと

やわしハらく花に對して鐘つく事

彼岸とて慈悲に折らする花も哉

海棠や咲てちるまて一ねふり

落行やこゝハ浮世の嵯峨の鮎

順禮の棒はかり行夏野かな
秋來ぬと案内するか荻の聲
わすしらて三日さきみつ富士山
秋やけさ一わしよしるぬくひ椽
花に行心や駕籠に桐の棒
峇入や雲に起伏ず頭巾あり
料理あり錢よ冬なし旅もなし
木綿帆やもろこし船も雲の峯
阿蘭陀の文字か横飛ふ天津雁
紫のうへこすれあき花野哉
いなゝきや小松幾野のつなき鳥

長崎 仝

安原貞室

安原貞室名は正章通稱ハ彥衛右門一農軒と號す
幼にして松永貞德の門よ入る資性頴敏よして俳諧を善くし且諸藝に達せ

しかば師の眷顧自から他に異りしが爲め同門の士松江重頼等の嫉む所となりて常に不和なりしとぞ

貞室の吟咏中最も人口に膾炙せる「是は〳〵と計」の句は實に古今の絕唱にして世に吉野山の詠多しといへども此妙境に詣れるものあらず

貞室は慶長十五年庚戌に生れ延寶元年癸丑二月七日に歿す享年六十有四山城鳥羽實相寺に葬る

○

○これは〳〵と計花のよしの山

へいさのはれ嵯峨の鮎くひに都鳥

須磨

＼松かけや月は三五夜中納言

鶯や國栖の翁の笛の弟子

猶哀れ撰殘されし蟲の聲

蟲の音をもらひ泣する夕哉

悼亡

の涼しさのかたまりなれや夜半の月

あとの月はみよしの、雲や富士の雪
春雨や花まつ人の心しり
けふといふ興をさますや月の雨
月影やかたけて通るかさの雪
抱て寐ても肌はゆるさぬ火桶哉
老の齒のけふもとけしな氷もち

北村季吟

北村季吟名は信澄通稱は久助拾穗軒、湖月齋又は七松子と號す近江北村の人なり
初め安原貞室に學び後ち松永貞德を師とす博聞强記にして國學に長じ且和歌を善くせり其鄉里に在りし時は醫を業として蘆庵といひ既にして京都玉津島の廟祝となり晩年幕府に辟されて歌學所に補せられ食祿五百石を給はり法印に叙し再昌院と稱す

季吟は寶永二年乙酉六月十五日よ歿す壽未詳ならず 八十二歳、八十五歳、八十八歳等各書の記する所各同からず
江戸下谷池の端正慶寺に葬る
其著述は八代集抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語同抄、百人一首同抄、源氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄、朗詠和歌集註、増補題林抄、大和物語抄、等をはじめとして註解する所の書五十餘種に及べり

○

おれよいはしや先御代をこそ千々の春

放時鳥　鳥籠のうきめ見つらんほとゝぎす

宗鑑舊跡　すきものはさくをあやかれ梅の花

山の景や一見さくらよはのうみ

鶯の和歌三神や月日星

女郎花たとはゝあれの内侍かな

冥加あれば宿にあやめをふき自在

忍戀　夏瘦とこたへてあとはなみだ哉

初夢や寐言よもいふ君ハ千代

まさ〳〵といますか如し魂まつり

地主からは木の間の花の都哉

年内立春

年の内へふみこむ春の日あし哉

日の本やたうとしはやす左義長

一僕とぼく〳〵ありく花見哉

秋風の口まねするや荻の音

哀傷

この時を空さめ〳〵と露時雨

信章江戸より下るに

いや見せし富士を見た目に比枝の雪

腹にけさ生ると見しか門の松

腹筋をよりてや笑ふ糸さくら

手折るれは里ふんなれや美人草

獸は吠る良なりねはん像

鷄冠井令德

鷄冠井(かいで)令德通稱は九郎衛右門他隣庵と號す京都の人なり
或年荒木田守武に倣ひ獨吟千句を爲せりといふ
令德は慶長十二年丁未より生れ延寶二年甲寅三月三日に歿す享年六十有八

○

住の江の波の鼓や松囃子
手の蛸も出るや吉書の筆の海
春永の年のかしらや福祿壽
かつらきや人橋かくる花盛り
ね入はなの園や萠黄の蚊やの内
達のめしすゆる禮義やさば世界
寒けたつ秋の時雨やふるたぬき
見そ萩のちりたや風の手すりこき
月代れ宿かる貫かこやのいけ
聲のおやおくめもないそねり雲雀

馬、合羽雪打いらふ袖もなし
稲妻のおもかけ見てや夜這星
袖塀の縫か朽葉の蔦かつら
初夢や有あまるほと金銀花

齋藤德元

齋藤德元ハ美濃岐阜の人なり織田秀信に仕へて齋藤齋宮利起と稱し祿二千石を食みしが關ケ原の役ょ秀信石田三成に黨して敗衂するに及び已れも亦逃走し剃髮して帆亭德元と稱せり
遁世後ハ江戸馬喰町に住して和歌連歌の指南を爲し幾ばくもなく京師ょ上り松永貞德の門に入りて俳諧を學び或年獨吟千句を爲して大に名聲を顯はせり老後若狹小濱に住し既ょして丹波に徙居す
德元は永祿二年戊午に生れ正保四年丁亥ょ歿す月日詳ならず享年八十有九天の橋立五臺山智恩寺に葬る

其著はす所の書に初心抄あり

○

何と見ても雪ほと黒き物はなし
何歌も扇にかけれ折句かな
桐の葉も汲分かたし井戸の水
春たつやにほん目出たき門の松
夏のきのさかいに聞ん郭公
やまとゝも唐ともいはし駒鳥のふり
老の秋わたり初るや四十から
細かにも月を碎くや露の玉
辭世
今まては生たれことを月夜哉

馬淵宗畔

馬淵宗畔は初め重治と稱して京師に住せり

風雅を好みて松永貞德を師とせり當時俳諧の點料は沈香一兩を常とせるが宗畔其師に勸めて銀一兩と改めしむ然るに野々口立圃も亦其例を追て銀一兩を收めければ宗畔再び師に向ていへるやう立圃すら猶斯のことし更ゞ銀一錢を增すべしと是よりして點料は遂ゞ銀五錢と定まれりとぞ宗畔は承應四年甲午の春湯浴中卒倒して竟に歿せり享年詳ならず

○

年の緖をつくやかゝみの餅そくい

尾をはねてなかは其名や鶯ん

めひてしもみればのたちのつはな哉

花鳥の春の名殘や鳴ねいり

七寶か植けん花そ籔つはき

聲なくてはへ飛かゝるいなこ哉

夕立ハ雲のはきれのこはれ哉

染つけて花野やうつす桔梗皿

あま雲になるやしるこの望月夜
松茸の匂ひを嗅のひしき哉
山よりもよはてるや猶紅葉餅
散のこる木末は秋のはてれかな
根なはりそさかぬはうごろもちつゝし
千のさし
あけてけふしをこゝろねのとしみ哉
吹あくる花や春風忉利天

池西言水

池西言水名ハ則好通稱ハ八郎兵衛紫藤軒又ハ風下堂と號す奈良の人（或は云ふ京都の人）なり
俳諧を松江重頼よ學びて元祿の頭其名四方に藉甚す後年江戸に來り既よして復京都に歸れり或時「木枯の」の句を作りてより人呼て木枯の言水といへり三宅嘯山の評に語盡意不盡果為合作ニとあり死後に門人此句を其

墓碣に鐫りて京極誠心院なる和泉式部の碑の傍に建立せり
言水は慶安三年庚寅に生れ享保七年九月二十四日に歿す享年七十有三
其著はす所の書に江戸辨慶、都曲集あり

發句

○

身を思へはいなするかやの螢哉
木枯のはてはありけり海の音
あふひ草かゝれとてしも牛の角
早乙女の見に行く宮の鏡かな
霞みけり日枝は都の山ならす
山萩の添竹はなしさりなから
更〳〵て鞠垣すこしけふの月
六月の蜜柑見せけり氷室守
菜の花や淀もかつらも忘れ水
とし玉に梅折る小野の翁かな
鶯に口きかせけり梅の花

涅槃會やさなから赤き日の光
猫逊て梅動きけりおぼろ月
蓮池に生れて常の蛙かな
つりそめてかや面白き月夜哉
沖なます箸の雫や淡路しま
日枝高く吹かへさるゝ野分哉
火の影や人にて凄きわしろ守
見よ來たる人かしましや須磨の秋
人魂は消て梢の燈籠かな
犬はへて家に人なし蔦もみぢ
尼寺や唯柰の花のちるこみち
文持てかむろ附けり蘭の船
はとゝきす櫻い杣よ伐れけり
浮れ出て扇子しめれり星月夜
匂ひ來る早稻の中から踊かな

一しきり[illegible]る出けり歸花

朝湯から傾城匂ふ菖蒲哉

藥玉やともしびの火のゆらくまで

高村和及

高村和及は露吸庵と號し直唱法師と稱す京都の人にして晩年洛西壬生村に幽棲せり

初め貞風を慕ひて常長を師とせしが後には蕉翁の風韻を學べり

和及は正保三年丙戌に生れ元祿五年壬申正月十八日に歿す享年四十有四

○

中わろき人なつかしや秋の暮

水の泣聲きく秋の寐さめ哉

夕千鳥大名船の唄なかれ

初櫻八重の一重の好みなし

辭世

甘みあき薄よ胡蝶哀あり
都出てもはやかなしき砧かな
初雪のつゝかれ人にわかるへし
妹か手に鐵槌やさし冬構
大名の通り過けり秋の松
稻妻や二本まてよむ小松原
長き夜や來ぬ人によむ鐘の數
うれしけに寺なぬれつゝ夕時雨
余の草にたとひおとるとけふの菊
朝良の種子とる人のこゝろかな
我としも四十四の花のわけく哉
行はとに最早山なしはとゝきす
くと〳〵と二日になりぬ衣かへ
橙や其みそのまゝ二年こし
人聲に尾のなき秋の夕かな

北村湖春

北村湖春名は季重幼名を休太郎といふ薙髪して湖春と稱す法印季吟の子なり父と共に幕府に辟れて歌學所に奉仕し花果院と號せり俳諧の風調は乃翁ヌ勝れるが如し

湖春は元祿十年丁丑正月十五日を以て父に先だつて歿す時に五十餘歳

○

天地の咄ときるゝしくれ哉

我駒の沓わらためん橋の霜

蓮翹や柳か枝に山吹を

蝶輕しころはきる物一つかな

名のつかぬ處かはゆし山櫻

日吉祭衆徒や生だる太平記

はつかしや蓮に見られてゐる心

名月や見つめてもゐぬ夜一夜

星一つ五位一聲の寒さかな
人我をかわゆしと見ん雪の笠
行年や京へとならは狀一つ
ふしの山師走ともなき姿かな
かた炭の崩れ哉身のなる行へ
日頃氣のつかぬ松あり揚燈籠
牡丹すく人もや花見とはさくら
こねりをもへらして植し柳哉
七種や拍子とる子の握はし
行春や門を過ゆく竈はらひ
笠とれは六十顔のしくれ哉
米やらぬ我家はつかし鉢叩

捨女

捨女は丹波氷上郡柏原の人にして田氏の女なり

幼より風流の志ありて六歳の時已に俳諧を善くし「雪の朝」の句を作れり長じて北村季吟の門に入り和歌をも兼學び後宮川松堅に從て專ら俳諧を肆へり或年大守某侯江戸參府の途次故らに駕を其家に枉げられ

萱原におしや捨おく露の玉

といへる句を賜ひて大に賞美されしとかや

二十歳の時宗族某に嫁して男子三人を生めり其夫死して後ハ落飾して貞閑と號せり其時の自詠の和歌に

秋風の吹來るからにいと柳こゝろ細くも散る夕かな

晩年播磨網干龍門寺の盤珪禪師の徒弟となり寺の邊りに草庵を結びて不徹庵と名づけ此に住せり

捨女は寛永十一年甲戌に生れ元祿十一年戊寅八月十日に寂す享年六十有五

○

日くらしや捨て置ても暮るゝ日を

雑煮煮や千代の数かく花がつほ
うき事になれて雪間の嫁菜かな
拝みたし涙くもらでねはん像
泣にさへ笑はゝいかにはとゝきす
來る秋のきりきりは見する一はかな
思ふことなき顔しても秋のくれ
粟の穂や身は数ならぬ女郎花
雪の朝二の字〳〵の下駄の跡
吹なれて皆にもならぬ尾花哉

立羽不角

立羽不角は江戸の人なり虚雲齋、松月堂、南々舎等の號ありまた其弟子千人に餘れる故に千翁とも稱せり
俳諧は岡村不卜の門に學びしが晩年師風を脱して自ら一派を開けり書

も亦其長する所なり
夙に安藤對州俳名を冠里と稱すと風雅の交りを爲せしが或時其邸にて歳を守り翌元朝の式に陪し「お雜煮や」の句を作りて奉りしに幾ばくもなくして對州には老中に任せられしかバ是より益寵遇を被り隨て世人にも亦大に重んぜらるゝに至れり
其子某或人の養子となりしが養母の懽心を得る能はずとて其家を出て來りし故に「けむくとも」の句を吟じてこれを教戒しければ某は再びたち歸りて孝養を盡し遂によく和熟したりとかや
不角は元祿年中法橋に叙し享保年間法眼に進む俳諧師にして法眼に上りしものは他にあらずといふ
不角は元和元年乙卯に生れ寶曆三年丙戌七月二十一日に歿す享年九十有二築地本願寺々中淨勝寺に葬る
其著書數多ありたれども有磯海、きよがんな等の外は燒失して傳はらず

いと惜むべきことにこそ

○

風やんで醉へもとす柳かな

入月のさはるか動く村薄

曉はおのれにかへる黄菊哉

お雑煮や菜も芋あがる今朝の春

けむくもやがて寐やすき蚊遣哉

大内に召し時

頼政か拾ひのこしの椎も哉

あしろ木のゆるきやみぬる氷哉

松取て常の朝日よなりよけり

我影に追付かぬる胡蝶かな

稲妻にかくさぬ借のやどり哉

薙髪せし時

けし坊主木の端てなし草のはし

辞世

空蟬はもとのはだかにかへしけり

西山宗因

西山宗因名は豊一通稱は次郎作肥後の人なり初め領主加藤家に仕へしが主家滅亡の後は薙髪し宗因と稱し京都に來りて北野に住し轉じて浪華の天満に僑居す梅翁、西翁、一幽、野梅翁、忘吾齋、向榮庵等の諸號あり夙に山崎宗鑑、荒木田守武の風雅を慕ひ里村昌琢に就て連歌を學び後專ら心を俳諧に寄せ松永貞徳の風を看破し終に自ら一家を立てり

延寶年間田代松意、杉田正友等江戸にて俳諧談林を唱ふるに方り宗因の東下を迎へて十百韻を興行す宗因は其巻頭に

さればこゝに談林の木あり梅の花

とせしかば人々大に感賞したりとかや又一日劇を市村座（座主を竹之丞といふ）に觀る此日蕉翁も亦來觀し偶然邂逅せるとき門人某

子はまさりけり竹之丞

とうち吟じて上の五文字を置き得ず宗因にこれを塡めんことを請ひけれ

ば其聲に應じておや〳〵と冠すべしと答へたり後に蕉翁此事を弟子に語りて其奇才を嘆稱ありしとぞ古今俳諧の老手は宗因、蕉翁の二人を推すといふ」

宗因は慶長十年乙巳に生れ天和二年壬戌三月二十八日に歿す」享年七十有八大坂西寺町西福寺に葬る

○

なかむとて花にもいたし首の骨

荘周

世の中よてふ〳〵とまれかくもあれ

筑紫にて

世の中の宇佐八幡に花の時

杜宇鳴やら淀の水くるま

華蹈皮もむかしは紅葉ふみ分たり

朝夕の人もめつらし今朝の春

本願寺にて

西風の何そ自力の扇つれ

思ひこめて見るへき花の若葉哉

白露や無分別なる置どころ

峯入は宮も草鞋の旅路かな

菜の花や一本さきし松の本

有明の油そ殘るはとゝきす

夏の夜や東ハなしよ月ハ西

浪花津にさくやの雨や梅の花

夏山や或は野よふす伏見船

三夕の内西行

秋はこの法師姿の夕かな

新春の御慶は古きことはかな

移行ハやいかのはり紙幟

或年の暮に

くれやすしこんなことなら百歳も

その一夜明けて元日

立やすしこんなことなら百歳も

井原西鶴

井原西鶴は松壽軒と稱す俳偕ハ西山宗因に學びて大坂談林の一人たり延寶年間攝津住吉の祠にて獨吟二萬三千句を作れり因りて二萬堂又二萬堂

の號あり
國學に精しく文章に長じ殊ょ戯作に妙を得たり彼の院本の作者たる近松門左衛門は其門より出でたりとなむ
西鶴ハ寛永十九年壬午に生れ元祿六年癸酉八月十日に歿す享年五十有二大坂寺町誓願寺に葬る
其著ハす所の書に小夜嵐、一代男等ありて世に行はる

○

鯛ハ花は見ぬ里もありけふの月
大みそ日定めなき世の定め哉
毛か三筋たらいてそれか呼子鳥
我戀の松島もさそ初かすみ
笠ふく人留守とハ薫る蓮かな
花なき山薪にせぬもはと丶きす
平樽や手なく生る丶花見酒

長持に春かくれ行ころもかへ

五十二歳 ○浮世の月見過しにけり末二年

椎本才麿

椎本才麿字ハ少文大坂の人一説には南部の人さあり なり初め山本西武に學びて則武と稱し中ごろ井原西鶴を師として西丸またハ西麿といひ後西山宗因の門よ入り才麿と更む狂六堂、舊德翁、松笠軒、甘庵泉等の別號あり

或年江戸に來りて

身の隱家に山を買けり

といふ附句を爲したりしを時の俳家沾洲竊かにこれを難せりと聞き俳宗にして買山の故事を知らず江戸の俳諧者恐るゝに足らずといひて其年の暮にまた「富士はわがの」句を吟じけり沾洲はこれを傳へ聞き己の非を覺りて

兎や角の年はつかしや暮の富士

と詠じたりとかや

才麿は明曆二年乙未に生れ元文二年丁巳正月二日に歿す享年八十有二大坂西寺町萬福寺に葬る

○

時雨ふり黒木になるは何〳〵ぞ

怠らて咲て上りし葵かな

水につれて流るゝやうな燕かな

蕣はすこしの間にて美しや

夕くれのものうき雲や鳳巾

若鮎は鵜の一嘴にたらぬなり

景淸もあきれし蚤の行衛哉

秋の暮男はなかぬ者なればこそ

花の木も物の見事な冬木哉

時鳥新茶よりこき聲のいろ
思ひ出て物なつかしき柳かな
富士い我買て置けり年の暮
梅か香にふけ行笛や御曹子

田中常矩

田中常矩名い忠俊通稱は甚兵衛剃髪して眞齋と稱す京都の人なり初め片桐良保の門に入りて俳諧を學びしが後にい其風調を變じて自ら一派を立つ當時京都に於て談林を唱ふるものは大抵常矩の派に屬せりといふ或時五百韵の巻頭に「蛇之介」が句を詠じければ是より人稱して蛇之介常矩といひたりとぞ」
常矩は其生死年月未詳ならず

○

花ありて犬のそたゝぬ里もなし

蚊柱を烟のけつる夕かな

世の中よ耳こそなけれ鹿のこゑ

はなれかたし星に七夕牛よ繩

太箸や民のさきくさ二葉とも

梅の花後家か軒端の東風ふかは

禪寺の花

花いかに狗子の佛性樗の暮

入相の匯よ花を見せしよな

蓬萊や高千穗の嶽よねの山

かい敷の青葉になりぬ花の鐘

御影供

大師葉辨當閉て入よけり

定治妻追悼

扨も夢蚊やひろた成世也けり

梶の葉實聲よ天下のやもめ露けき秋也

やよ根芋世は子ありての親祭

蛇之介か恨の鐘や花の暮

月夜よし酒屋芋賣須磨明石

松茸や波こす柚酢をしはりつゝ
馬子やとき飛脚や遅き橋の霜
棒鱈や雲あらさるよ何の龍そ
なれとも又秋は夕くれ七芝居
星の牛和歌の六くさを飼にけり
岩根筋蟻の枝折や若葉垣
蛸足の箸捨松や藤の韋
姫瓜に三千の林檎顔色なし
常の日の暮さへうきに年のくれ

鳴瀧人の山荘

伊藤信徳

伊藤信徳初めの名は宗肖通稱は助左衛門自ら號して桐梯園といふ京師の人なり

信徳幼にして松永貞徳の門に入る貞徳其才を奇として興ふるに偏諱を以てせり貞徳歿して後ハ山本西武を師とし又高瀬梅盛にも從へり中年の頃

談林の徒に與みして師の風體を變せしも晩年に及でハ活眼を開きて正風に歸し蕉翁と交り又高村和及其他と日夜相會して俳事を修するの外他なかりしとぞ或時江戸の芭蕉庵より音信ありて上國の風體如何とありしに恰も交友數輩相集りて宴を開ける際なりければ興に乘じ「雨の日や」の一句を書して答へたりといふ

信徳ハ寛永十年癸酉を以て生れ元祿十一年戊寅十一月十三日に歿す享年六十有六

○

若やかん嫁菜になれて干大根

地うたひの燃しさりなる薪哉

凉しさは葛のいろなり水茶碗

薄くもり氣高き花の林かな

名月ハ豆數うる夜のはしめ哉

居風呂や庭にしハしの冬構

箔付る羽子板賣のことはかな

雨の日や門さけて行燕子花

うつかひや若きは人の目ゟ立す

すさましや女の眼鏡年のくれ

さみたれや茂みか中の花石榴

三月や清水寺の瀧もうて

富士にそふて三月七日八日哉

かゝる世は蝶かしましき羽音哉

名月や今夜生るゝ子もあらん

明くれて大根うまし神無月

一とせをたゝ一目なる岡見哉

生駒萬子

生駒萬子ハ金澤侯の臣なり世素封家を以て聞ゆ別號を白鷗居士といひ又此君庵とも稱せり

萬子ハ蕉翁と友とし善し元祿の初め蕉翁と始めて相見て謂て曰く翁の門人ハ諸州に充滿して道の融通は足りぬべし吾は今より方外の友となりて普く俳諧を守護すべしと契約したりとなむ後年翁再び行脚して金澤ヨ過られしに萬子ハ後れて至りたる爲め相逢ふことを得ざりしかば直ちに裸馬ヨ策ち追躡して松任驛に至り相面することを得て贐するヨ白衣一領及び金三兩を以てせしに翁ハ其志の厚きを感じて白衣をば受領し金ハ偷見を惹くの媒なりとて辭退されしとぞ

常ヨ立花北枝、秋の坊等と相交り屢次其匱乏を救ひ又自ら主人となり時ヨ或は騷人を會して娛ましめたりといふ

萬子ハ其生死年月未詳ならず

○

秋風や稻から出て稻ヨ入る

煤はきやまたての茶屋もふあしらひ

つくみ啼尾の上の松れ明にけり

岩踏て一と目〳〵の櫻かな

一聲てこゝをしまふか郭公

浅間

引明や山はけふりて野らの雪

酔た手て若菜つむへき雪間哉

青梅や桑とる歌の息やすめ

炉塞の空のけしきや青たゝみ

秋の夢見てや啼出す麥鶉

武家家督相續

鑓梅や接穗の末も芳れしき

正月やかあらす酔て宵月夜

小刀に手をかけみれと女郎花

駕籠よりれ牛の上から梅の花

少人の扇に

思へとも雛の哥かく扇かな

尋る戀

夕顔やふくへやまかふ君か宿

花薄きひは穗に出てくれれけり

一とせや餅つく臼のわすれ水
妹背山をとこれかりの鵜舟哉
秋草に何のゆかりそ黑き蝶
呑程に三日月かゝる櫻かな

山口素堂

山口素堂名ハ信章字は子逹太郎兵衞と稱す今日庵又來雪ハ其別號なり甲斐に產れ（一說に江戸の人ともいへり）江戸に來りて本所に住す
素堂好みて和歌の書を讀み博聞强記にして又詩文に巧みなり俳諧ハ北村季吟に學びて常に蕉翁と交ハれり其什たる根源する所あるが故に高潔閑雅なるもの多し
天性至孝なり人或ハ妻を娶らんことを勸むれども固辭して聽かす是老母の意に違はんを恐れてなり
晩年深川に別莊を營み蓮池を鑿ちて交友を會し晉の惠遠が白蓮社に摸擬

せり俳諧ㇾ祉の設けあるは蓋し此に基くといふ
素堂は寛永二十年癸未ㇾ生れ享保二年丁酉八月十五日に歿す享年七十有五江戸谷中感應寺後に天王寺中瑞香院に葬る

○

浮葉巻葉此蓮ㇾ風情過たらん
澤潟や弓矢立たる水の花
雨の蛙聲高になるも哀れなり
ちる頃や明石の鯛の花さかり
長雨の雲吹き出せ青あらし
垣根破る其若竹を垣根哉
年もいや牛流れつ御秡川
棉の花たま〳〵蘭ㇾ似たる哉
我舞て我に見せけり月夜影
三日月をたわめてやとす薄哉

後の月
芭蕉追善

ふんきつて都の秋を下りけり
池よ鵜なし假名書ならふ柳哉
茶の花や利休か目にはよしの山
唐土に富士あられけふの月も見よ
哀れさやしくるゝ頃の山家集
冬瓜に思ふこと書く月見かな
目には青葉山ほとゝきす初かつほ
旨すきぬ心や月の十三夜
彌兵衛とは聞と哀れや鉢叩き
もしやとて仰く二日の初月夜
西瓜ひとり野分をしらぬ旦かな
名もしらぬ小草咲さく野菊かな
市に入てしはし心を師走かな
辻占の髭ぬく橋の小春かな

小西來山

小西來山は和泉堺の人なり既に長して攝津の今宮に棲遲す十萬堂または湛々翁の號あり

幼にして父母をうしなひ親族の家に養はる常に讀書に耽りて手に卷を釋てず前川由平大に之を奇とし勸めて弟子となせり其敏達なること一を聞て以て十を知るの才ありされば年未二十ならざるに机を立てゝ俳宗となれり蓋し中葉談林の巨擘(きよはく)にして宗因の一派は來山に至りて大成せりと謂ふべし

人となり踈放にして酒を嗜めり或年の除夜に門人某の許より翌元朝の雜煮の具を調して贈り越せしに恰も酒を飲みて下物の盡きたるときなりしかばよき物を得てけりとて頓て煮てこれを食ひ「我春れ」の句を作りてうち興せしとかや

生涯娶らず常に女人形を愛翫して左右を離さゞりしことは其記に詳なり

文も亦諳すべければ左にこれを抄出す

西行法師に銀の猫を給ひけるに門前の童子にうちくれて通りしとかやいはくぞわらめ我ハ洛にてやきもの丶人形にあひ懐にして家に歸り晝ハ机上にすゑて眼によろこび夜は枕上に休ませて寐覺の伽とす世を見れば畵本達磨など崇めて科もなき身を白眼つめらる丶よりはるかにましてんや物いはず笑はぬかはりにハ腹たてず悋氣せず蚤蚊の痛みを覺えねばいつまでも居住ゐを崩さず留守に待らんとの心遣ひなし酒のまぬハこ丶ろうけれどさもしげにものくはぬはよし白きものぬらねばはげるとなし四時おなじ衣裳なれども寒暑をしらねば此方氣のハることも更になし夏ハむかふにす丶しく撫るにこ丶ろよく冬ハ爐のもとをゆるさねばよいかげんにあた丶かなり女の石になりかたまりしためしを思へば石が女に化すまじきものにもあらず千とせを經とも變ずまじきかたち風老がなからんあとの若後家さりとも

氣遣ひなし舅は何國の土工ぞや出所をしらずあらうつゝなのいもせものかたりやな

折る事も高根の花や見たばかり

其洒落なることを以て觀るべし

來山は承應三年甲午に生れ享保元年丙申十月三日に歿享す年六十有三其辭世に曰く

來山ハ生れた咎て死ぬるなりそれて恨も何もかもなし

○

唐辛子茄子の朱に奪れす

時鳥裸て起て橋ふたつ

我寐たを首上て見る寒哉

飯餉の可愛やあれて果るけな

重たくと雪付けて來よ若菜賣

梅の花名に呼よくて匂ひ哉

褒愛子

兩方に髭か有なり猫の戀
香を持て掘おこさるゝ芽うと哉
春雨や火燵の外へ足を出し
見かへれハ寒し日くれの山櫻
凉しさに四つ橋を四つ渡りけり
竹の子を竹になれとて竹の垣
早乙女やよごれぬものハ歌はかり
初夜と四つ爭ふ秋になりにけり
干網に入日滴つゝしくれつゝ
春の野や長きかつらの裾につく
手も出さて物荷ひ行枯野哉
何の木と問ふまてもなし歸花
夏川や草て足ふく時もあり
春の夢氣の違はぬかうらめしい
蚊ふすへの中に聲あり念佛講

ぬす人の錢おく雪のやとり哉
元日やされハ野川の水の音
蕣に置とは露のつよみかな
我春は宵にしまふてのけにけり
花咲て死とも ないか病かな
松の月枝よかけたりはつしたり
むしつてはく捨つ春の草
はとゝきすぬれて帷子一つなり
雨戸こす秋の姿や灯の狂ひ

上島鬼貫

上島鬼貫は攝津伊丹の產にして名は治房通稱ハ三郎兵衛槿花翁と號す又佛兄、囉々里居士、即翁等の別號あり
初め俳諧を松永重頼に學びしが後よは西山宗因を師とし元祿享保の間小

西來山と雁行して其名四方に聞ゆ嘗て近衛家ゑ伺候しけるに其日は雲卿月客相つどひて和歌の會を開ける折柄なれば其席に召して俳諧を作らしむ鬼貫其室の床に小野小町の像を書きたる軸物の掛けあるを見て其賛を爲さんことを望み頓て「あちらむけ」の句を題しければ滿座の人々大に感稱しけりとかや又弱冠以前の事なりしが或會ゑて

ちよと見には近きも遠し吉野山

といふ前句ゑ附けて

腰に瓢をさけてふら〱

といひければ執筆より吉野山に瓢の故ありやと咎められて當惑せしがさあらぬ躰にて

よし野山花の盛りをさねとひて瓢たつさへ道たとり行

といふ古歌ありと答へたり是詐りゑて全く一時を彌縫したるなれども即意當妙斯の如し其才力感ずるゑ餘まり

家貧しくして資財ゑ乏し或人其女子を樵門の妾に出さんことを勸めたれどもこれを肯せざりしとぞ亦其氣概を觀るに足れり

鬼貫は寛文元年辛丑に生れ元文三年戊午閏八月に歿す享年七十有八伊丹墨染寺ゑ葬る

餞別

骸骨の上を粧ふて花見哉

○

そちへふかれてこちらへ吹かれ秋の風

花ちりて又しつかなる園城寺

秋もいや宇多の炭竈けむりけり

花の頭扇さいたり諸職人

行水のすて處なき蟲の聲

鶯か梅の小枝ゑ糞をして

われか身に秋風寒し親二人

春の水ところ〴〵に見ゆる哉

秋風の吹わたりけり人の顔

續

油さし〳〵つゝ寐ぬ夜かな
井のもとの草葉よ重きつらゝ哉
撫子よ河原に足のやけるまて
咲からよ見るからに花の散からに
春風や三保の松原清見寺
雲の峰なんは嵐の崩しても
木よも似す扨もちいさき榎實哉
何と菊のかなくらりやうそ枯てたよ
鶯のなけは何やらなつかしう
何處更る空のおてとも雨の月
桐の葉い落ても下よ廣かれり
人の親の鳥追けり雀の子
枯蘆や浪華入江のさゝら波
蓬萊の禁へ通ふねすみ哉
燃る火に灰うちきせて念佛哉

眺見れは江戸も降なり春の雨
あちら向けうしろも床し花の色
鳥はまた口もほどけぬはつ櫻
何を見て彼岸の夕日入たかり
春雨のけふはかりとて降にけり

秋色

秋色ハ江戸照降町の菓子商某の妻にして俗稱を阿秋といへり幼より風雅の志ありしが十三歳の春花を觀んとて東台に至り清水觀音堂の巽位よある垂絲櫻を觀て「井戸端の」の句を題し其枝よ附け置きしに時の法親王殿下にハ深く文雅を好ませたまひ日々山内の櫻に附けある詩歌俳諧を取あつめて彼是と評を下されしに此句最も秀逸とハ極まりぬ是よりして此櫻を秋色櫻と呼做せり

秋色或時某侯の別邸にめされしが其庭園ハ竹樹泉石の美を以て都下よ鳴

れり秋色の父ハ好機會なりとて身を奴僕ニ扮裝し従ひ行きて意のまゝに觀覽せしが薄暮より烈しく雨降りいだせしかば侯家にてハ籃輿を以て秋色を其家ニ送らせらる然るニ秋色は父の辛苦せるを見て舁夫に事を命じ其間ニ父と代りて己は雨衣を纏ひ鐵笠を戴き扈從して歸りしを知るものとてハなかりしとぞ其孝順ニして而も洒落なること此の如し

其師其角は放蕩にして老後身を寄する所なく多くは己の家ニ起臥せしかば其歿後暫く其角の點印を用ひ既ニして之を深川湖十に傳へしとかや

秋色ハ享保十年乙巳四月十九日ニ歿す壽詳ならず

○

井戸端の櫻あふなし酒の醉

始てめされたる御かたにて

見ぬかたの御園の瓜の汗ふかん

佛めきて心置かるゝ蓮かな

雛の尾のやさしうさわる菫哉

戀せすハ猫の心の恐ろしや

雨たれに袖もあやめの匂ひ哉

ひとり居やしかみ火鉢も夜半の伽

蜆とり早苗にならふ女かな

ものゝふの紅葉よこりす女とは

是きりと思ふ日もあらん相撲取

つゝじの名を
底白よ紅粉はきのこすつゝし哉

交りを紫蘇の染たる小梅かな

翠簾さけて誰か妻あらん涼舟

曉を引板にかゝる妻もかな

辭世
見し夢の覺ても色のかきつはた

涼しさや日の落かゝる海の上

櫻井吏登

櫻井吏登は江戸の人なり初め李峒と稱し後に人左叉ハ斑象ともいへり其師服部嵐雪歿するに臨み其點印を高弟淸水周竹よ授けしも周竹ハ其身

己に老たりとて之を吏登に讓れり因りて吏登は雪中庵二世と稱し一時は
嵐雪の名をも冒せしが幾ばくもなくして吏登に復せり
晩年深川に卜居せし時は僅に二疊敷の小舍に書を積み案を置きて其中に
住し殆んど膝を容るゝ餘地なきも晏如として淸貧を樂み風雅の外には更
に心を寄する所なかりしとかや
吏登は寶曆四年甲戌六月二十五日に歿す享年詳ならず

○

いつの間に來て居ることぞ小田の鴈
此中に翌元日そおかしけれ
冬來なは我ときてねよきりぎりす
名月や桔梗かるかや女郎花
また來よ例の齒ぬけの鉢叩
秋の風蘇鉄の肩へかゝりけり
水仙は咲ても似たる人はなし

凩やあとさきさき見えぬ草の原
鶴よりは鶯よ乘らん年の暮
おく霜やたまく鹿の足の跡
粥すゝる夜へになりけり鹿の聲
爐開きや櫻くれたる古手紙
大竹や人れ眠たき五六月
夕立に下りてもゆかず牛の主
一筋もあたにはたれぬ柳かな
明よけり皆初春になりよ凫
老か秋明六つを聞おもしろさ

水間沾德

水間沾德通稱は次郎左衞門合觀堂と稱す江戶の人なり
少かりしとき中橋よ住みて磨工たりしが俳諧を善くしまた舞曲に堪能な

りしかば内藤風虎露沾二公の寵を受けて常に其邸に出入せり或年飛鳥井大納言雅章卿事に坐して陸奥の磐城に謫せらる領主露沾公其愁欝を慰せんが爲め沾徳をして剃髮し名を友齋と命じて其側に侍らしむ既にして卿は赦に逢ひ歸京されしかば沾德も亦江戸に還り露沾公の旨を奉じて露葉と稱し後に沾徳と改む
沾徳初めは露言を師とせしが終に一派を起して世人の推崇する所となれり又能書の聞えありて印に代ふるに文字を以てせり世の朱墨兩點を加ふることは沾徳を以て其嚆矢とす
沾德は寛文五年乙巳に生れ享保十一年丙午六月晦日に歿す享年六十有三

○

人の氣もかく窺し初さくら
元日も旅人を見る驛かな
是皆我子 似我蜂にならぬ子もなき彼岸哉

鑓よなり長刀よなり杉の雪
諸物あれと魚にして銅籠の花
たが猫そ棚から落す鍋の數
水と羽と合せ行鵜や夕すゝみ
百姓の茶のこきうちや桃の花
足跡の蛛手にあるやかきつはた
道〳〵はたはねてもちる杉菜哉
帯はどに川の流るゝ汐干哉
月鉾や松原西へ入佐山
雪とけや都へ出し下駄のあと
春の野や木瓜は莚のしき合せ
地うたひの燃しさりなる薪哉
五月雨や降にわかる水のみち
繦につく子もさあ歸れねむの花
一尺のわらひの外や松かしわ

有明や二斗とる椎の梢より

菊岡沾涼

菊岡沾涼名ハ房行藤兵衛と稱す伊賀菊岡の人なり地名を以て氏とす南仙齋また崔下庵の號あり沾涼は晩年の號にして內藤露沾公（陸奥磐城平の城主）の賜ふ所なり

資性穎達にして和漢の書を涉獵し博識强記通せざる所なし少ふして江戶ょ遊び芳賀一晶の門ょ入りて俳諧を學べり

沾涼ハ貞享元年（甲子）に生れ延享四年（丁卯）十月十四日に歿す享年六十有四淺草誓願寺に葬る

其著はす所の書に俳諧綾錦、百花實、諸國俚人談、日本行程記、江戶砂子、溫古志、藻塩袋、奈良土產、日光名跡志等あり

○

沾の字を賜はりし時

人の和はすぐなり竹の若ざかり

十分に沾ふ空や夏つくば

もろこしの一里も夏の夜明哉

浮立や花のうろこのしのゝ梅

野も空よ空も野よありけふの月

初雪ややう〳〵土の消るはと

鶯の遍昭素性はとゝきす

明日をかむ氣色を見せて福壽草

千代女

千代女ハ加賀松任の人なり後年落飾して尼となり素園と稱す幼より風流を好みて俳諧は支考を師とし文書は呉俊明を學びて兩なから佳境に入れり

千代女は安永四年乙未に歿す壽未詳ならず

○

始て夫に見へたるさき
夫に別しさき

朝かほゝ釣瓶とられて貰ひ水
溢かろかしらねど梯の初ちぎり
起て見つ寐てみつ蟵の廣さ哉
みよし野に闇一むすひ柳かな
草むらのるすに風おく雲雀哉
鍋墨の行へはつかし杜若
てふ〳〵の夫婦寐餘る牡丹哉
落鮎や日に〳〵水の恐ろしき
秋立やはしめて葛のあちら向
朝かほは其日にあふてしまひけり
松風を植て聞たし雲の峯
紅さいた口もわするゝ清水哉
目に結ふ谷間〳〵の清水哉
手あくれは結ひ目のなき清水哉
日の脚の道つけかへる茂り哉

わけ入れハ風さへきえて閑古鳥
綿ぬきや初めて夜着の恐ろしき
吹け〳〵と花に欲なし凧
足あそハ男なりけり初さくら
福わらや塵さへけさの美しさ
蝶〳〵や女子の道の跡や先
子を亡ひたるとき
蜻蛉つり今日ハ何處まで行たやら
朝顔や地に咲ことをおふなかり
花咲ぬ身は狂ひよき柳かな
千なりや蔓一すちの心より
或人肥太りたる女を見て笑へるを取なして
一かゝへあるも柳はやなき哉
春の夜の夢見て咲や歸りハな
うき草や流れては又咲かはり

横井也有

横井也有通稱ハ孫左衛門半掃庵と號す名古屋侯の重臣なり資性淳樸にして他の嗜好なく專ら文雅を樂めり俳諧は蕉翁の風調を慕へども定まれる師とてはなし常に人に語つて曰く我に俳諧の師なく又門人もなし云々と或時松木淡々が自ら矜り人を侮ると傳へ聞き始めて相見しときに「化物の」の句を詠せしとかや

致仕して後其用ふる所の什器は總て一具の外ハ備へざりしとぞ又其著書鶉衣にしるせる俳の掟ありいと面白きのみか其儉素の德をも見るに足ればば左に之を抄記す

一飯は三石の掟を守るべし

茶の花のころもを奈良茶の盛り哉

一汁一つ菜一つ酒の肴も一つに限る鰹節に精進の斧を遁るべし夏ハ必ず茄子を用ひ豆腐は三季に渡り香の物は論外なり

音も香もせぬや豆腐の冬籠

一酒ハ膳の前後をすべて三盃を過すべからず
　いかさまよ四たいはくらし村時雨
連衆に酒好ありて此箇條の掟よ甚だくるしむ依て了簡の一句をしめす
　狐さへ五こんとどもる霜夜哉
一菓子ハあるよまかせて先づ煎豆と定むべし
　いり豆に音こき交てあられ哉
一燈ハ行燈にてことたりぬべし
　蠟燭はたつといふ名の寒さ哉
　　右條々
也有は元祿十五年壬午に生れ天明三年癸卯六月十六日に歿す享年八十有二
其著ハす所の書に鶉衣、浦の梅、野父談、小皮籠等あり

○

生娘の袖誰が引て雛の聲
喰へもせぬもの引に出る子の日哉
初午や禰宜よ化たる莊屋殿
行春を蛙ほど啼物もなし
晝顔やとちらの露も間にあはす
哀れ世や麻木の箸の長みしか
蕣や紺に染ても强からす
ちかつきよ逢たび寒き頭巾かな
しやせましせすやあらまし藥喰
追のけて犬の座をとるすゝみ哉
驚かす螢の夢や眞菰刈
初物に市人さわくしくれ哉
一本にかたまる人や遲さくら
松風の里何處迄そ門飾り
化物の正體見たり枯尾花

山はしくれ大根引へく野はなりぬ

岡西惟中

岡西惟中は因幡の人なり故あつて備前岡山に住し晩年浪華に移る初め杉田望一に學んで一有と稱し後に西山宗因に從ふて惟中と改む一時軒、閑々堂は其別號なり

頗る多能にして儒及び醫を業とし和歌に巧みに俳諧に長じ又書を善くせり

惟中は寛永十六年己卯に生れ元祿五年壬申八月十日に歿す享年五十有四

其著はす所の書に枕草紙旁註、徒然草直解、砂金草紙、續無名抄、和歌秘密抄等あり

○

老ちにけり世を思ふ故に今朝の春

上元や松にはしめて春の月

とくちりて見る人かへせ山櫻
とりとめぬ風も見えけり朝氷
帶ふるしいまた旅なる衣かへ
除夜 鬼を追ふ網金時よ方相氏
柳から眠さそふや春の雨

大淀三千風

大淀三千風は伊勢の人なり佛門に歸して呑空と名づく寓言堂また無不非軒の別號あり
性聰敏よして幼より俳諧を好み成童の時已に達吟の聞えありたれども嘗て師に就て學べるにあらず獨學以て之を致せるなり延寶年間獨吟三千句を爲し因て自ら稱して三千風といへり
四方に行脚して奥の仙臺よ留まること十五年再び故郷よ還り既よして又出て相模の大磯よ赴き其地に西行庵を營み其傍に曾我祐成の妾虎女の像

を安置して鳴立澤の古跡を存し碑を建てゝ自ら東往居士と稱せり盖し此費金ハ悉く三都の娼妓に勸化してこれを募りたるものなりといふ三千風の歿年は詳ならず其行脚の首途日即ち四月四日を以て命期とすべしとて左の辭世をも遺し置けりとぞ

無始以來行脚の宿の喰逃を今六文て木賃すつめり

○

花にこよと笠たゝかる一は哉の三日月を蹈へて落るひはり哉

奥の院何やらものか呼子鳥

葉か散て中〳〵輕きやなき哉

この庵の盥あつかりや蔦蘿

の死屋ハ稻負鳥のねくらかな

鳴立澤 鳴立てなきものを何よふこ鳥

首途 けふそはや見ね世の旅の衣かへ

八幡にて
二度手打澤ほとゝぎす　杜若

此いほり京へしらすな郭公

一聲や犬西行にほとゝぎす

舍羅

舍羅は其氏名傳はらす元祿の頃浪華に住みて貧と雅とには著名ある隱者なり

檐傾き壁破れたる茅屋の内に一妻一女と共に薦を敷きて其上に起臥し常に儋石の儲へなきも自若として風流を樂めり加賀の北枝其風流を傳へ聞き或年浪華に遊びて訪ひ來り雅談に時を移しけるに飲食の設けもなければ北枝は空腹に堪へ兼ねて何ぞ飢に充たすべきものありやと問ひければ舍羅答へていふやう斯の如きの貧家一物の畜へあることなし若し其紙袋に米あらんには炊ぎて呈すべしと北枝其袋を採り見て僅に二合計りもあるべしといへば舍羅は其米にて四人の腹を養ふべければ迚も十分には呈し

難しといひつゝ炊ぎたり北枝は呆れながらも其量の大なるに感じたりとかや又嘗て勾空に贈りたる書あり其文に

去るべき處に遊吟して歸り見候へば隱者臥所に夜盜入りたりとて邊りのともがら訪ひわめき候入べき所もあるべきに仕合のなき者にて候されど是ぞと心掛たるにや大切の盃なくなり候へば

　盜人も酒がなるならおぼろ月

とて打臥申候其頃惟然坊此地におられ候て

　盜まれて手柄そ花に何處なりと

以て其人と爲りを觀るに足る晩年に及びて剃髪せしことは東華坊の文にて徵すべし曰く

浪華の舍羅剃髪の前も舍羅といひていはつの後も舍羅といふ此舍羅を捨てゝその舍羅をか求めむ舍羅〳〵として更に舍羅なし

　一たびは瓢の花のわたま哉

含羅は其生死年月未詳ならす

○

手も出さて机に向ふ寒さかな

蒲の穂やこけかゝりたる軒のつま

立ならふ木も古ひけり梅の花

落つかぬ空なり宵のほとゝきす

淋しさをさそひよきたか蟋蟀

押合ぬさきにちりけりけしの花

二三日内にも居らす猫の戀

燕や子を思ふ身のひまもなし

凉菟に尋ねられて

荻蘆の友達や此したらくさ

白菊の揃ふた畑や九月盡

深閑と星崎寒し草まくら

雪ふりや堤にかゝる片いさり

初鷄のわした〱や無盡藏

松木淡々

松木淡々ハ浪華の人（或書に江戸の人とあれども非なるが如しなり）元祿の末江戸に來り其角の門ニ入りて渭北と稱し遂に其執筆と爲れり享保の初め堀内仙鶴京都ニありて大に鳴ると聞き已れも亦上京して祇園祠の邊に住し半時庵淡々と改稱して仙鶴と相競ひ都人の耳目を驚かせり當時言水方山晩山其諺の徒正風を唱へて淡々の變体を駁すといへども泰然として已れの流派を弘め其名四方に震へり

人と爲り豪邁にして奢侈を好み衣服飲食殆んど王公に擬せり故郷浪華に歸隱するニ方り門人五橋なるもの師の欲する所のものあらば何事にても命ニ應ずべしとありけるニ淡々答へて浪華ハ他に憂ふべきことなしといへども唯川水を飲用するの一事は甚だこゝろよからず幸ニ京の水を送りたまハらば老後の悦びこれに過ぐるものあらずといひければ五橋はいと

易きことありとて日々便船に託して水を送れり浪華に住みて京都の水を飲む高貴の人といへども恐らく爲し難きことあり晩年和泉の堺に徙居す

淡々は延寶二年甲寅に生れ寶暦十一年辛巳十一月二日に歿す享年八十有八

○

菜の花の世界にけふも入日かな

口くせのよしも春の行へ哉

曉や灰の中よりきり〳〵す

初雪や波のとゞかぬ岩の上

民は手を帶にはさむや野分あと

白露の宿かしかねる柳かな

鶯の夜〳〵落す雫かな

さゝ蟹いうこめくに蜘蛛の冬籠

まくは瓜されハ思へは年一夜

辭世

朝霜や杖て書きし富士の山
森の鵜のうきを羨む篝かな

建部涼岱

建部涼岱は吸露庵と號す初め葛鼠と稱し又其北國に在りしときには都因ともいへり

少かりしとき野坡に從て俳諧を學び既にして加賀に遊びて希因を師とし又伊勢に至り梅路に就て附句を習へり後に江戸淺草寺の門前に居を占めて雷神門の風神が袋を負へる狀の可笑とて俳號を涼袋となし其俳諧を廢して專ら片歌を唱ふるに方りては凌岱或は綾太或は綾足と稱し又書には寒葉齋の號を用ひたり

才氣人に勝れて能せざる所なりしといへども事毎に厭忌し易くして俳諧に遊ぶかとおもへば何時か繪畫を業とし乍にして僧となり又乍にして還

俗し終始功を全ふしたるものゝ一もあるこ[illegible]

涼岱は享保四年乙亥に生れ安永三年甲午三月十八日ょ歿す享年五十有六

其著はす所の書に西山物語、吉野物語あり

○

たま棚や灯せは外へ草のかけ

吹かたへ心の多し女郎花

燕や歸りかゝれは猶早し

こきませて櫻も淋しかれ柳

晝の蚊の夢や一筋芋の蔓

秋はきぬ露むす萩と薄に

市中や馬にかけゆく紙鳶

祇園迄顔は日陰のおふき哉

立寄を見て追つけは清水哉

川音につれて啼出す河鹿哉

村〳〵は茶色に霞む小春哉
浦のはる千鳥も飛ず明にけり
海を出てぬる丶月日や五月雨
浅草庵を結ひしとき　笠はとあ庵とおもへ初時雨

谷口蕪村

谷口蕪村名は長庚字は春星三果東成と號す其書名を謝寅といふ博く和漢の書に渉り稗史小説といへども亦讀まざる所なし人と爲り磊落にして技藝を以て貴紳に交はるも敢て媚諂ふことを爲さゞりしとぞ水邊に家居し漁獵を以て生業とし錢盡るときは漁して其得る所の魚を都市に販ぎ歸路には酒を沽て自樂めりといふ
蕪村は天明六年丙午を以て歿す享年未詳ならず

○

順禮の目鼻書ゆくふくへ哉

拾ひ棄す田螺よ月の夕かな
きのふさりけふいに鵬のあき夜哉
鶯の鳴やちいさき口あけて
春の海ひねもすのたり〳〵哉
春の水山なき國を流れけり
春花に舞いて歸るさ憎し白拍子
炭賣よ鏡見せたる女かな
衰へや小枝もすてぬ年木こり
鰒のつら世上の人をにらむ哉
木枯や何よ世わたる家五軒
凩雲のよすから月の千鳥哉
窓の灯の梢にのほる若葉哉
養父入の夢や小豆の煮るうち
吹売の浮葉に煙る蓮見哉
道の邊の刈藻花さく宵の雨

つり鐘にとまりて眠る胡蝶哉

酢桶をこれへと樹下の床几哉

三椀の雑煮かゆるや長者ふり

心太さかしまゝ銀河三千丈

菜の花や月は東に日は西に

はあり飛ふ富士の裾野の小家より

年守や乾鮭の太刀鱈の棒

渡鳥こゝを瀬にせむ寺はやし

鯨うり市に刀をならしけり

大島蓼太

大島蓼太は空摩居士と稱す雪中庵三世の宗匠なり門人某嘗て蓼太の「五月雨や」の句を漢譯して以て長崎に來航の清人よ示す清人大に感賞して左の一書を贈れりといふ

蓼太先生隱君子也都人士以爲金馬侍從之流亞矣中略蓋僕亦有所感也因賦一絕寫其意傚響之謂所不辭也

長夏草堂寂連宵聽雨眠何時懸月色松影落庭前

蓼太は深く芭蕉庵の舊趾を慕ひて其近隣なる要津寺の境内ゟ古池の形を摸し小堂にハ蕉翁の木像を安置し其傍に一草庵を結びて芭蕉庵と呼做し又其後園に地を相し蕉翁の像を瘞めてこれを俤塚と稱へしとかや

蓼太の生涯の吟詠は六十餘部に及べりとぞ實ゟ盛なりと謂ふべし

蓼太ハ享保三年丙戌ゟ生れ天明七年丁未九月七日に歿す享年七十要津寺俤塚の側に葬る

○

元日や佛法いまた注連の外

初暦更に死ぬ日いなかりけり

○ひつとして戻れは庭に柳哉

若水や升なき時の人こゝろ

○世の中は三日見ぬ間に櫻哉

陽炎のはきよせてある屑火哉

○五月雨やある夜ひそかに松の月

里の灯を含みて雨の若葉かな

出帆招く遊女も立てり花薄

朝顔や秋は朝から哀れなり

黄菊白菊雖紅ゐの節句かな

顔見せて行あふ梵論や秋の暮

白萩や露一升に花一升

達磨忌や廓然として菜大根

牛の尾の外れ動かぬ枯野哉

春雨の油ぬけたり初しくれ

燈火を見れは賊あり夜の雪

うつくしき灯のともりけり夜の雪

美人生む人もあるらん雪のくれ

年のくれ月に雨夜の貸こハん

ふすもあり見送るもあり女郎花

追れてや月に隠るゝ螢かな

たましいの入もの一つ種ふくへ

二つつゝかそへて淋し鴈一つ

白雲やちるとき花のよしの山

名月やうまれかハられ峰の松

埋井や掘かねし世の苔の露

白銀の猫をもすつる花の旅

俳諧名家列傳附句抄續篇畢

明治廿六年三月五日印刷出版

正價金拾錢

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　淺尾德太郎
日本橋區上槇町十六番地

東京日本橋區本町三丁目
發兌書林　博文館

寸珍百種

毎月二回又ハ三回發兌

毎編讀切新珍形美装本

正價 一冊拾錢〇六冊前金五十七錢〇十二冊前金一圓八錢〇百冊前金八圓〇郵税一冊四錢ツヽ

本書目次